
天の邪鬼と猫かぶり

陸一 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の邪鬼と猫かぶり

【NZコード】

N0680P

【作者名】

陸一潤

【あらすじ】

「ボクは落ちたんじゃない！落とされたのさ！」

11月中旬の、冬も近い秋のある日のことだった。

歩道橋から落ちた女子高生と、目撃者の五人の学生達。変人幽霊に取り憑かれた目撃者の一人、藍は、彼女の犯人探しと謎の少年の復讐劇に巻き込まれる。

歩道橋に居たのは、猫かぶり、天の邪鬼、人魚の少年、赤毛の不良、青いランドセルの女の子……そして、魔法使い。

ミステリーで青春でファンタジーでオカルトな憎愛劇…？通称猫鬼。

(ブログでは完結しています。http://ameblo.jp/
uume-6/)

プロローグ

まるであの日が、ボクの日になる。

こんなことを、つい数分前の自分は夢幻にも思わなかつただろう。

頭上高く彼方に浮かぶあのマルは、ほんのり銀に浅黄を滲ませ、蒼の中に佇んでいる。それは365日変わらずにある不变の日常だつた。今日は運よく雲ひとつない快晴。秋晴れだ。

急速に暁が短くなつていぐ西日が日に痛い午後4時。

ボクは落ちた。“落とされた”。あの空へ、確かにボクは一瞬で、叩きつけられたのだった。

その日は朝から違和感があつた。

体が不調というわけでもない。例えば、そう『何か』足りないような、かと思えば『何か』がそこにあるような。

増えているような、減っているような。そんな違和感だった。

母が掃除でもしたのだろうか。

違和感を最初に感じたのが、自宅であつたためそう思つたのだが、どうも違う。見慣れたはずの通学路でもそれは感じた。学び舎の自分の席に座つても。

(何か違つ)

その時、視界の端に“何か”映つたような気がして、坂城藍は首を回した。チャイム間際の朝の教室を舐めるように見渡す。隣の席で、ついでに名前順でも隣の坂上が、何事かと見てきたのですぐやめた。

違和感は消えない。

そうだ、心靈写真を見たときに似ている。ふと見て、『あれ?』といつこの感じ。

その様子を、上から見ていたボクはといえば、あまりの退屈にまた死になっていた。

退屈は人を殺すというが、その通りだ。欠伸が止まらない。

もうすると、あら。やっぱり彼は自分を認識しているのだろうか。あちらも欠伸する。

欠伸が移るのは、条件反射のようなものなのだという。場を共有しようという、人間の反射。さらにいえば、欠伸

が移りやすい人は優しいお人よしだとか。

無意識かな、たまにボクを視線で追うのだ。ボクが動くと、彼の視線も付いてくる。それがまるで、親の姿を追う何かの雛の様で。

そつと、彼のひよこ色の頭に、手を伸ばしてみる。

いやあ、やつぱり柔らかい。うん、予想を裏切らない男である彼は。

『ん?』

悦に浸っていると、田の前に大きく、綺麗な色の瞳。おお。

『 いんじみ ?』

小首をかしげて言ってみた。

『 やあ初めまして。君に取り憑いている者だ』

引き攣つた短い悲鳴が、朝の教室にキンと響いた。

↙語り部やんのはなし

人は言ひ。『さて』という言葉は、物語を始める上で、とても大切な魔法の言葉であると。語り部を名乗る者は『さて』の言葉から始めるべし。はてこれは名探偵の定義だつたろうか。

さて、これから語りますのは、いたつて普通の学生らが、魔法使いに出会つてなんぢやらへ、というなんともチープな物語である。世界探せば、こんな物語はいくらでもあるだろ。最近はあれが盗作やら、どじどこの著作権やらつるさい時代だ。王道、というものもあるので、それに言い換えてもいい。ようは、これは一つの物語としてはとても有り触れたものであるということだ。

しかし普通も普通なりに、個性や考え方があるものだから、もしかしたらセオリー通りには行かないかもしないが。

ようは見方である。ボクもある面ではとっても普通。ただの高校生だ。青臭くちよつと馬鹿で、その時樂しければ満足できる。

しかし、そうはうまくいかないのが世の中だ、というのがほどこかのお偉いさんのお言葉である。

ボクらは大人に憧れる時はもう過ぎた。それは、大人もボクらと大して変わんないんじゃないか　？つて、気づいたからなんだよね。

少年よ大志を抱け！でもその大志に致死量を超えた多大な毒を含んでいた場合、ちょっと早くに生まれちゃっただけのクラーク博士達は、はたして責任をどこまで取つてくれるんだろうか？

半円を描くように薦が絡むデザインの青銅の門は、この高校の象徴ともいえる存在だった。

私立の女子高。偏差値はそこそこ。

語学に強く、就職よりも、その筋の大学への進学のために通うような学校だった。高校卒業資格が欲しいだけの生徒はそうおらず、海外への留学生なども年に数人はいる。歴史は五十年ほどの、地元では名門校だ。

お洒落にうるさい年頃の女の子が通うのだから、制服も紺のセーラーとシンプルながら、シルエットが綺麗で、さらに細かい刺繡が利いていて可愛い。

そんな学校の象徴である門は、雨にも風にも台風地震、雷にも負けず、どっしどと女学生たちを迎える。見送る。

無言で佇むその姿は、まるでここに生徒を象徴しているようだ、梓はそのターコイズブルーの柱の横で姑の世話に疲れた嫁の様な溜息を吐いた。

季節は十一月も半ば。門の両脇に植えられた桜の紅葉が、ちらほらと舞う。

クラス全員の顔も覚え、それぞれのキャラクターのイメージが固まり、団結力と言うものが生まれてくる。そんな季節である。

それに加え、秋と言うのはイベント事がが多い。文化祭に体育祭、参観授業もあれば席替え野外実習授業、テスト・・・。

秋は憂鬱だ。

長期休暇以外のアルバイト禁止のこの学校で、お小遣いも夏休みで出尽くし、あとは年末お年玉を待つばかり。

梓は小さいころから物語が好きだった。その多くは、童話もしくは児童文学である。

この世に生を受け16度目の秋。

夢に飛び込んだアリスではいられない。悠長に、兎なんぞを追いかけるわけにはいかないのだ。

スーザンほゞすっぱりナルニアを忘れることは出来ないが、だからと言つてアンドルーおじの様に、土に植えられるわけにもいかない。そんなことをしていたら、象に光合成を求められる羽目になる。（それなのに。嗚呼、それなのに・・・）両手で顔を覆つて泣き崩れてみるべきか。否、したくても出来ないのだが。

時間は事が起るより、少し前のことだった。

学校からの帰宅途中。五間田で終わる水曜日。繁華街を横切る駅前。そして歩道橋の上。東の蒼と西の橙、わずかな光の瞬き。すれ違う人。

ボクは盗まれたのだ、きっと。

さて、その時、歩道橋に居たのは五人の学生だった。それぞれ面識などは無い。ありふれた、年齢もバラバラな五人の学生である。時刻は丁度、午後4時ごろ。少しづつ下校途中の学生が零れてくる時間。

眼鏡の女子高生は歩道橋から落ちた。

金髪に蒼い目の男子中学生はそれを見た。

もう一人の蒼い目の少年はその場を何事も無かつたかのように離れた。

蒼のランドセルの女の子はそつと下を覗き込んでみた。

赤い髪の不良は慌てて歩道橋を駆け下りた。

これはハッピーエンドをより盛り上げるための神様の仕打ちか。
それとも頭の浮ついた近頃の餓鬼をシメるための断罪か。

それならばなぜ自分達なんだと、声を大にして叫びたい。しかし
残念、彼らは魔法使いに選ばれてしまった可哀想なクソガキ達だつ
た。

・・・さて、その日魔法使いは、子供を集めて呪いをかけたのだ
つた。

坂城 藍・天の邪鬼

彼は大層なネガティブである。

まだ丸みの残る輪郭に、長い金色のまつ毛、高級磁器の様な肌、名の通り濃い藍色の瞳、桜色の唇ときたら、もつどこの御国の王子様？と、言いたくなるような容姿である。

性格も、この年頃の男の子にしては気配り上手、基本的に自分がされて嫌なことは絶対にしないことを信条にしている。世で言いつわゆるK-Y人種とは対極に位置し、臆病なほど、周囲の確認を慎重に行つ。

そんな彼の唯一の欠陥と言えば、そのネガティブに他ならない。いつでもどこでも『最悪の事態』を想定するのである。それは人の心にも言えることで、目の前の人物が“もし”今の言葉に傷ついていたら、を手始めに、？もし“この人が自分を嫌いなら、となる。その結果として、彼は常に頭の中で『自分』、『他人』の二つのカテゴリーを作り、言動の選択肢の仕分けを行つてているのである。

これはモノによって対処が違う上に、不要な部分を削ぎ落とそうとすればするほどに果てのない、大変疲れる作業なのだ。しかも常に情報の整理が必要なため、持ち場を離れることを許されない。過酷な労働である。

若干十四歳にして、坂城藍少年がこうなってしまったのは、前述のその容姿にある。

彼は金髪碧眼であり、戸籍上は日本人だが、その体に75%流れるは西洋フランスの血だった。父はハーフ、母にしては、パリに住ん

でなかつた純粹なパリジエヌ。つまりフランス人。

純度75パーセントといえば、チョコレートならばびっくりの苦さ。

彼はその味を恐れているに他ならない。

日本人の多くは、黒髪に茶の混じつた黒眼だ。義務教育も終えれば、髪色を変えることもあるだろうが、残念なことに彼の周囲はまだ幼く、生まれたままの黒を保っているのが大半である。

外見の不一致は、つまり第一印象が固定されやすい、ということになる。彼は人間関係において、最初から第一印象を捨て、自分の立ち振る舞いを見せてからの第二印象での対人間関係の勝負を賭ける。その末の、あのネガティブといつ名の保険だ。

彼の父は何故だか日本の地で、日本人ではない母を見つけ、選び、結ばれたのだから、最早因縁としか言いようがない。

『そりや君は先をちょっと子供らしくないけども、大丈夫だつて、ハタチ過ぎれば天才も普通の人だよ』

身も蓋もないことを、幽霊は眼を細めて藍の頭の後ろで言つた。

「……山崎さん」

声色で、勝手に頭の中を覗くな、と抗議する。

『混乱の原因』『不可解な状況』の最たるもの。貼り付くように、一定の距離から離れないこの幽霊。

肩に付くほどの大黒髪の大人しそうな外見に、真っ赤な眼鏡を掛け、紺色の制服を纏う。どちらかといえば図書館に居そうなお姉さんなのだが、藍は彼女に会つて三日。すでに多大な苦手意識を持つて

いた。

『ボクは君に取り憑いてるんだ。一寸だつて離れられない。いいじやん現役セーラー女子高生が取り憑いてるんだようっ・響きだけでいくないかい?』

「セクハラですよ」

『難を言え、君がボクより可愛いことだね。なんだいヒロインより可愛い主人公。攻略されるのは男の娘、なんてショール』

彼女に話は伝わらない。ぐるりと幽靈は空中で風船のように弾んでターンした。ひざ丈のプリーツスカートの中、足が丸見えになつたが、太ももには体操着らしいハーフパンツが顔を出している。
『ボクなんてさあ、老け顔だから制服姿だとAVに出てきそうだとか言われるんだよね。』

失礼しちゃうよね、眼鏡は眼が悪い人が使う道具だよ?そういうもの見て、そういうこと考えるからそう見えるんだよ。眼鏡は耳にかけるもんさ。それ以外何をかけるつてんだ、つて話だね。精神的不衛生極まりないよねえ君はどう思う?』云々。

今度はその場に寝そべり、退屈した子供の様に、無意味に手足をばたばたさせるこの女。
(色気も何も無いな)

幽靈の名前を山崎梓という。少し前まで現役女子高生だった年上の女の子だ。

十一月上旬のあの日。午後四時じふ。下校時に通学路にある歩道橋の上、そこから彼女は落ちた。

駅前の大通り。事が起こったのは夕方だったが、高速道路も一キロ先にあり、歓楽街も近いその道は、夜でも車が絶たないほどの大きな道路だ。落ちた彼女の体は軽自動車に一度跳ね飛ばされ、そして対向車線を走っていたもう一台に下敷きにされた。

『いや、あれは潰された、と言つべきだね』と梓は言つ。

つまり坂城藍は、彼女が幽霊になつた瞬間を見ていた“目撃者”と“被害者”的関係である。

『ああ、到着到着』

梓の声と共に、藍は自分の席にどさりと鞄を置いた。置き勉をしない主義らしい藍の鞄は、実に重量感のある音をたてた。

藍の通つている学校は、いたつて普通の公立中学校だ。教室は下駄箱にも購買にも近い一階、旧校舎とも言われる北校舎の角。冬はまだしも、窓の上にケヤキの木がかかつたこの教室は夏には涼しく、好立地好物件である。

ただ難なのは、旧校舎と言うだけあって、薄暗い雨天の夕方などは大変に雰囲気があるというだけか。

『知つてる？ケヤキって木によつて紅葉の色が違うんだよ。この木は見事に真つ赤だよね。うんいいよね赤は。魔性の色だね。ボクのラツキーカラーなんだ』

藍はそれを無視した。しかし彼女は、最前列右端・廊下側の藍の机に腰掛け、ペラペラと独り言を話している。

それは、何が好きでこれが嫌い、というような自分自身のことと、生活にこれっぽっちも役に立たない雑学だった。聴いているかどうかは、もはやどうでもいいらしい。

『ねえ浅黄色って知ってる？新撰組の羽織の色なんだけど』
秋も深く、ケヤキの紅葉が窓の外を彩る。人のまばらな教室で藍は考えに伏せつた。その梓のことである。

さて、事故は一瞬に起こったことであり、藍自身はその歩道橋で梓の斜め後ろ五メートルほど先に居たにも関わらず、実のところ落ちた瞬間もその後も、彼女がどんな状況だったのか。よくは見ていない。

落ちた彼女に真っ先に駆け寄ったのは、彼女と同じ高校生らしい年頃の青年だった。学校をサボっていたらしい彼は、私服姿で真っ赤に頭を染めたいかにもな不良だったが、誰よりも早く階段を駆け下り、逃げようとした運転手をとつ捕まえて、救急車を呼ぶよう指示した好青年だった。

藍自身はと言えば、クラクションの音、不良少年の「逃げんなテメエ自分がナニしたか分かってんのか！」という怒声と、他の目撃者の「人が落ちた」の言葉で、ようやっと状況を把握した。

そんな自分に、何故、彼女が自分に取り憑くことになつたのか？

藍は寺の息子だ。当然、父も葬式等に呼ばれることがある。藍自身も手伝いに駆り出されることだって、小学校のころは結構あつた。そう少なくない檀家さんの名前も頭に入っている。

経験として、御遺体を見たこともある。

しかし心靈、幽靈、というものは、もしかしたら、一番縁遠かつたのかもしれない。供養の心は染みついているが、藍は幽靈の存在を信じていなかつた。梓が初めてだ。

成仏させてやりたい、とは思つ。だが、梓は藍の持つ幽靈のイメージからは一線を画していた。

とにかくうるさい。さらにいえば、すゞく邪魔。ふとしたときこそ怒鳴りたくなることも少なくない。

そもそも本人に、まったくその気がない。

最初は再三、言つたのだ。「この世に未練でもあるんですか?」「出来ることなら、何か協力しますよ」「言つてみてください」今となつては、そんなチープな台詞を吐いたことが恥ずかしい。藍はとうとう、梓に『成仏』を促す言葉どころか、とりあえず自分から引きはがす言葉しか掛けなくなつっていた。

さて、梓といえば、藍のことを、悪い意味でとても気に入っていた。

梓にもなぜこうなったのか。それが多大な疑問だった。しかしそれを上回るものが今あるのだから、それはいい。

ついつい反応が面白くて苛めてしまふが、彼とはまるつきり初対面である。確信がある。

何せ、目立つのだ。藍少年は。

黒髪の中の金髪、名前と同じ藍色の眼。顔立ちも将来有望。今は小柄だが、あと数年成長期が来てぐつと大人に近づいたらまだしも、まだ幼い顔は小さなころからそう変わっていないはずだ。

故に簡単かつ明確な結論。『ボクは過去の彼を知らない』

これがSFなら、時間旅行で未来の自分が過去の彼と、となるのだろうが、あいにく今は未来も何もあつたもんじゃない幽霊の身の上。これ以上ミラクルは起こらない。

チャイムが鳴り、ノートを広げる彼の黄色い後ろ頭を見る。

事故から三日が経過している。

その間に分かったことは、坂城藍少年の生い立ち家庭事情、そして彼がたいそうに真面目ということだけだった。

真面目だからこそ、あれこれなんだらう。

自分がこの十六年の人生で、経験したことの無いことを彼は知っている。それを見つけるのが楽しい。しかし彼自身がその尊さ、偉大さ、稀有さ・・・・とにかく凄さに気が付いていないのだ。藍は

自分をつまらない人間だと言うが、そうでもない。むしろ、梓にしてみれば面白くてたまらない人間だ。

梓から見れば変えられないのだから無駄なこと不毛なことだが、当人にしてみれば、変えられないこその大切なこと、だ。

梓は問い合わせる。
キミの好きなもの嫌いなものはなあに？答えるもよし、答えないもよし。返事はなくともいい。

せいぜいぐるぐる悩めばいいさ青少年、なんて思う梓もたいがい子供らしくない。

ああ、これだからボクらは引きあつたのかな。なんてね。
・・・と、考へてゐるあつという間。暇で暇で仕方なくなるかと思つたが、意外となんとかなるものである。何せ考へるべきことは色々あるのだから。

凛は驚きに眼を剥いた。何が起こつたのか、一瞬理解しかねた。

(人が落ちた)

人が目の前で落ちて行つた。

けたたましく響いたクラクション人が集まつてくる。

タイヤが道路を滑る音。

怒声。「逃げんなテメエ自分がナニしたか分かつてんのかッ！おい！」

怒声。「うるせー！ 駄くそ！」

声。「人が落ちたつて」「マジかよ」「やだあ」下を見る気にはなれない。

どうしようどうしよう。ぐらぐらと頭が揺れた。どうしたらしい。灰色のコンクリートの地面も揺れている。自分の頼りない細い手が見えた。それで眼を覆う。これのせいだ。

セイレーン、という力があった。

それは超能力の様なもので、しかし物理的にはまったく作用しない能力である。

そもそもセイレーンとは、ギリシア神話等に登場する、西洋の女の妖怪だ。女神だったり、半鳥半人だったり、怪鳥や、ただ単に妖婦と呼ばれたり、人魚としても知られている。その多くに共通するのが、歌声で人、特に男を惑わす姿である。

俺は十四の時に魔法使いに会った。

可笑しいとは思つてたんだ。だって俺は他とは違う。流石に十四年。うつすらとは気が付いていた。無条件に人に好かれる能力。よくよく意味を考えた。

・・・・・鳥肌が立たないか？ああ、吐きそうだ。

力は眼に宿るという。それは俺も例外ではなく、俺の力が一番大きく影響されたのはこの眼。

辺りが暗くなってきた。薄ぼんやりと、光。ああこれも俺の眼からだ。青白い対の光源。たいそう今の俺は不気味だろうな。

・・・・・先ほど彼女は俺を見ていた。

サイレン。救急車。音に誘われ、色めき立つよつてギャラリーがさらに騒がしくなる。

「おい。オマエ、大丈夫か?」

ぐい、と強い力で脱力しきった肩を引かれ、凛はよろめきながら振り返つた。

「わっ、ス、スマン大丈夫か?」

「・・・・・いえ」

「本当か?」

目の前に、いかにも不良、といつよつな少年が立つていた。真つ赤な短髪は夕日のせいではないだろう。鋭い目つきをやや和らげて、少年は凛の顔を覗き込む。凛はその視線から逃げるよつて、前髪で目を隠した。

「体調でも悪いのか?まだそこに医者残つてゐるぞ。車の運転手の方が頭打つたらしいから」

よくよく見れば、彼は先ほど少女を轢いた運転手を捕まえた少年だ。

それに気付くと、凛は「大丈夫ですから」と、彼から距離を取つた。

歩道橋を降り、重い足がふと止まる。

(・・・・・馬鹿みたいだ。あそこで居たつてあつたことは変わらないのに)

どれだけの時間、あそこで呆然としていたのか。明らかに空は暗くなつてゐる。

事故によつて起つた鉄の箱の群れと生臭く濃い夜の雰囲気を感じ、本当に氣分が悪くなつたような気がした。

俺のせいだ。

力は凛の人生を変えた。学校では孤立したし、両親はそんな自分を持て余してゐる。それはありありと眼に見えてわかつた。魔法使いに出会つてからは特にそれは謙虚。

・・・・もう、どうしたらしいかなど出てこない。

(・・・あの子に会いに行こうか)

混乱した頭が叩き出したのは、一番やつてはいけないことだつた。

何を馬鹿なこと俺は・・・・！

自分を叱咤する。今は駄目だ。今は。絶対に駄目なんだ。まだ帰れない。まだ。ギャラリーは増えてきた。遠くなるサイレンが耳を刺す。まだ駄目だ。会えない。

見つかるわけにはいかない。

じきに警察も来るだろ？。そんな時、身元不明の男子中学生がウロウロしていたらどうする？どうなる？

離れなきゃ。

今は忘れるんだ。やらなきゃいけないことは他にあるだろ？。やらなきゃいけないんだろう！忘れる。忘れて、また終わつたら思い出せ。今こうしている間にもあの子は。

・・・一時も無駄には出来ないのだ。

やれるのは俺だけだ。『セイレン』、『人魚』の俺だけだ。

人魚の呪いは人魚にしか解けないのだ。

『逃げんなテメエ自分がナニしたか分かつてんのかッ！』あの高校生の怒声。まるで全て見透かして、今こうなつてゐる自分に言われたような。

わかってる。わかってるよ。わかってるから。優先順位だ。俺にはこっちがよほど大事なんだ。比べさせるな、頭が痛くなる。

彼女は可愛い妹。俺の理解者。

・・・俺はもう普通じゃないのは分かってる。全部終わつたら少しはある魔法使いに感謝しようか。

足なんていらない。知りもしない誰かと同じじやどうせ、妹は守れないんだから。

人魚は歩く足も、綺麗な声も、もちろん優しい王子という人間もいらないのだ。ただ可愛い妹さえ幸せなら。

山崎梓・猫かぶり

彼女は自分以外に見えないことをいいことに、この幽霊生活をかなり楽しんでいる。その大半が、軽い体を生かした曲芸やちょっとした悪戯、子供の様なことばかり。高校生は大人ではないだろうが、しかし自分よりは大人に近いはずだ。

彼女は16。つまりあと四年で大人にならなければいけないはずの人間なのに。

(・・・ここは道を変えた方がいいのだろうか)

「このままいくと、例の歩道橋を通らなくてはならない。放課後の通学路で、藍は悶々と頭を悩ませていた。

先を歩く梓は楽しげである。どうも道路に映る影を踏んで、一人遊びしているらしい。今ではそんな遊び、小学生だつてそうしない。ああ、またあの駐車場だ。

知つてか知らずか、彼女にとつてこの道は、自分が命を落としたあの場所へ向かう道。どうなのだろう。怖くは無いのか。やはり避けた道を歩いてやつた方が

・・・・梓曰く「眞面目な」彼は、好かないはずの彼女について、その薄い色の眉をぎゅっと寄せて考えた。

(そうだ、やっぱり)

いつしか下がっていた視界が、少女の満面の笑顔で一杯になった。

『「そうだ病院に行こう」』

彼女はそう言つて手をたたく。藍の心臓は急激に機能を速めて大量の血液を体中に送り始め、藍はとつたにその場で足を踏ん張った。

「病院？」やつと藍は訊を返した。

「どうしてまた

『ボクの体が運び込まれてるはずだ。ちよつとどうなつてるか見てみたいんだ。嗚呼ボクはなんで忘れてたんだ。自分の体を上空から見下す。なんていう幽霊特権！

そして台詞は『起きなさいよ！私の体でしそつ』ふふふいいねえいいねえ夢だねえ』

彼女は楽しそうではあるが、忘れてはいないだろうか。事故から三日経過している。

「体はまだあるでしそうか。もひとつへいきに運ばれてるんじや。・・・・・

へたしたら焼かれてるのでは。

一瞬で行きつく考え方、すつと背筋が寒くなつた。もし自分なら自分が居ないうちに、十数年間共にしてきた体が葬式に出され、焼かれ、灰になつていたとしたら、そうなつたら、きっとどうしようもなく

・・・・・

「行きましよう今すぐ！」

『ええ・・・・・いいよ今度で』

彼女はそう言つて、心底面倒くさそうに髪を搔きあげた。『今度の休み、ゆつくり行けりつよ。無かつたら無かつたでああその時で』これはぞんざこにあるべれいじではない。『良くないです。最優先事項ですよ』

力強く、藍は力説した。

『ははつ、難しい言葉知ってるねエアイちゃん。中学生も恐ろしこ

ね』

「山崎さん、これは人の生き死にのTOPに関わることです」

『TOPで。ははっ、それなんか可笑しくないかい?』

「常識的に考えて、つてことですよ。今日行きましょう。『うぐいぐいとその背を押す。触れる背は冷たかつた。この冷気は彼女自身の体がそうだからなのだろうか。なぜだろう。どうしようもなく悲しい。』

『仕方ないねえ、藍ちゃんは』梓はそう言って他人事のように笑つた。

鞄を部屋に放り込み、財布だけ持つて家を出る。藍はバスか自転車かで迷つたが、結局自転車の鍵を差した。

無言でペダルを踏むと、冷えた頭に先ほどやり取りが思い出された。

(・・・・自分のことなのに)

彼女は自分のことに無関心すぎるのではないか。

自分なら、と考えてみる。ある日突然死んだとして、どう思うだろつ。

まず気になるのは自分の身。想い出、夢、将来。次に家族、友人。いるなら恋人だって。(どう見てもいそうにないが)全て彼女はどうでもよさげである。『めんどくさい』とまで態度で示す。

(・・・・最初、彼女は何て言つたつけ)

最初に会つたのは彼女が幽霊になつてから。事故の次の日だった。(急に、だつたような気がする)

日常がなんとなく、違つたと感じた。昨日、あんなことがあつたからだろつかと思った。

(・・・・何て言つたつけ)

『ボクが最後に見たもの、何だかわかる?』

藍の後ろで梓が言った。どんな体勢かと信号待ちの時に見てみれば、後輪に座るよつとして乗っていた。どうやってバランスを取っているのだろう。不思議だ。

『満月が見えたんだ。ほら、あの口満月だつたろ? 落ちる時に、空が落ちるっていうけどサ、まさにそれだつた。ボク、一瞬自分の眼があの月になつたかと思つたんだ。』

梓の髪がなびく。この幽霊はたまに、まるで質量があるかのような様子を見せる。

紺と白のセーラー服。スカートはきつちり膝丈。四角い眼鏡はフレームが赤い。肌は意外に白く、眼はツリ目がちだ。ゆるく波打つ背まである髪は真っ黒。瞳は濃い茶色。

こうしていると、まるでビーナの優等生だ。

『浅黄色つて、わかるかい?』

『・・・・新撰組の羽織の色でしょ』

そう言つと、梓は満足そうに背を丸めて笑つた。

『・・・・ボク、君に言つてないことがある』

梓は今までになく静かに語つた。

信号が青になる。右足をペダルに乗せた。

梓は空を見上げていた。豊かな髪からちらつと見えたそれに、細

い首だ、と思いすぐ目をそらした。

『いっぱいあるよ。本当に、たくさん』

語尾が灰色に溶けていく。

背中越しの物体は、やはり冷たかった。

最初、彼女はこう言つた。

『やあ、はじめてまして。君に取り憑いているものだ』。
自分にも生活があるので、藍は彼女が自分にまとわりつくのを
放つておいた。たまに、『本当に帰れないんですか』とやんわりと
促してみる。それが三日続いた。

(僕は、本当に頑張つただろうか)

ただ、邪魔だからという理由だけで、彼女をぞんざいに扱わ
なかつたか?

三日間はいつもと変わらず短かく、いつも通り緩やかな弧を描い
て、陽は空を廻つた。

何がが抜けている。藍はそう感じた。彼女は、何がが足りない人
間だ。

それが情なのか、それとも他の何かか。まるで子供だ。

興味では無い。藍には三日間共にした人間のことを、いつも何一
つ分からぬ、そのことに抵抗があつた。

梓は自分が今まで出会つた中で、一番不可解な人間だ。そう思つ
た。そして、もう少し彼女に付き合おうとも。

梓について語らうと思つ。前述の通り、彼女はファンタジー小説が好きな私立の女子高の生徒だった。

それなりに、将来についての夢もある。そのため彼女は、あの語学が豊富に学べるあの高校を選んだ。

家はまったく普通の家庭。はつきり言つてしまえば、就学生制度を使用せずにこの私立に通うといつのは、かなりの負担である。何せ名門私立、三年間で五百万ほどの金がかかる。まだ十代の梓にはまだまだ縁遠いと思っていた、くつきりと浮かび上がるリアルな数字だった。

しかし一人っ子長女と言う期待もあってか、彼女は念願叶つてこの学校に通うことが出来た。

十一月も半ば。入学して丁度半年を切った。金欠に喘ぎながらも、親しい友人と楽しく毎日を過ごす。勉学に励む。学校では学校の山崎梓。家では一人娘で長女の山崎梓。

梓はそして今、藍の前の『山崎梓』が出来上がっていくことを感じていた。

梓は自殺などをするタイプではない。それなりに思春期特有の影もある。が、夢に向かつて歩いているつもりだった。彼女は、少なくとも今は、『死』を感じたこともなかった。

あくまで梓は『落とされた』。あの歩道橋の上から。

さて、考える。

あの場に居たのは五人の学生。つまり梓にとって四人の容疑者だ。あの時ことを思い浮かべてみよう。

蒼いランドセルの小学生。梓と反対側から歩いてくるのが見えた。

体格的にも梓を押し上げることなんて不可能。彼女は除外。

不良の高校生。彼も前から歩いてきた。

彼も除外。

あと二人。

梓とすれ違った男子中学生と、そして梓の後ろを歩いていた坂城藍。

私はそれなりに夢を見るのが好きだった。

藍にはまだまだ言つていことはたくさんあつた。ひとつ。自分が『落とされた』こと。

指を一つ立てる。ふたつ。犯人探し。みつ

落ちる直前に見えたもの。

黄色い後ろ頭が眼に入る。振り向いたらまず、あの真っ青の眼が眼に入るのだろう。（あの色は忘れない）

今度は梓が彼の後ろに居るがさて（・・・・・どうじよ

つかなア）

梓は自分のことには無関心なのではない。そんなことは彼女の性格上ありえない。

梓は、生きることを一度も諦めたことなど無かつた。

：人魚姫

この苛立ちを、どう処理したものか。

彼女の中で、一いつ三つと姿が現れ消えていく。

カーテンの隙間から三日月が見えた。昼間は明るい水色のカーテンも、宵の中では深い藍色を被せて揺れていた。今夜は風が少し強い。

苛立つことばかりだ。腹立たしい、腹立たしい　　自分を邪魔するもの、道をふさぐもの、惑わすもの。

なんで、どうして、どうして、どうして。

叶わない恋だったことは、わかっている。でも今の私の動力源は、まさしくそれなのだ。邪魔するものを排除しない限り、動けやしない。

あの丸い、真珠の様な両眼を思い出す。美しい人だつた。海の底の大粒の真珠である。手のひらにシンと立つそれは、確かに大切に守りたくなるような姿だ。

わかっている。　　分かっている。

決して、わたしは同じ土俵上に居るわけではない。劣っているのは自分の方だ。

競うとすれば、彼のように、または彼女のように、特別な眼でも無いと駄目なのだろう。特別な力でも無いと駄目なのだろう。あの兄妹のように、秀でた何かが無いと。私は舞台の下から、野次を飛ばすことしか出来ない。

最近、一人クラスメイトが事故に遭つた。

恐ろしいこと、その日、恐らく私が彼女に最後にコンタクトを取つたのだ。

といつたつて、睨みつけただけだけ。

視線は合つた。そのあと彼女は、なんでもないようすに先に眼をそらし、・・・・・ その帰り道、歩道橋から落ちた。

(そんな、まさか)

その翌日に、先生から彼女に悩みはあつたかと聞かれた。教師は自殺を疑つてゐるらしい。

そう話す方ではない。実を言つとあの日、初めて視線を合わせて会話した。しかしあの時の自分の意見を主張する彼女の眼は、あまりにも強かつたのだ。自殺なんてするだらうか？

(まさか)

もしかしたら、なんて考へてしまう自分は末期なのかもしれない。冬は近いが、まだ温かい秋の夜だった。窓を開け放してもいいくらいには。

だとうの[に]。

【魔法使いのはなし】

魔法使いはいました。

おんナジになりたいのです。

違うから省かれるのです。ならばおんナジになります。

そう言って魔法使いはみんなにお化粧をほどこしました。

まるで、魔法のようだとみんなは喜びます。

踊るみんなに魔法使いは手をたたき、祝福します。

さて、そして輪になるみんなの中、つまづく踊れなくてしょんぼり

する一人を指しました。

「次はあなたが魔法使い」と。

【trope】

言葉の比喩的用法。言葉のあや。

【pageant】

パージュントとは、「ページを開く」と書う意味の言葉から来ており、歴史的な出来事の場面を本のページをめくるように次々と表現し、自由に創造するといつ意である。

- ・（歴史的な場面を舞台で見せる）野外劇、ページュント。特にクリスマス聖誕劇のこと。
- ・（時代衣装などをつけた壮麗な）行列、山車、華やかな見もの
- ・（壮麗な行列を思わせる）田を見張るような連續
- ・壮觀・壯麗・盛儀
- ・ラテン語「舞台」
- ・（意味のない）虚飾、見せびらかし

匂い立つもの

山崎梓は覚えている。

じわじわと暗くなる視界。それは夜が近づいていたためか、それとも他の何かだったのか。

夜の匂いが近づいてくる。昼間、慣れ親しんだあの空気はきっと、陽の匂いが漂っていたのだ。

陽の匂いが消えると、こんなふうになるのか。そう思った。

音はひたすらにうるさかつた。

何も考えることは出来ず、ただ、この匂いは嫌いではないと思つた。

ただの子供だった梓にとって、『夜』はとても魅力的な時間だったのだ。

梓が運び込まれたと思われる病院は一つしかない。だから藍はまっすぐにそこに向かった。

大学の付属病院と看板を掲げたそこは、敷地も大きく入院患者がメインだが、近所に救急医療病院もある。

病院は信用第一。この界限で『病院』といえばまずそこだ。

しかし入つてすぐ、藍は思わず立ち止った。

「・・・どうしよう」

『なあにが?』

梓は呑気に欠伸をしながら、藍の顔を覗きこむ。

「 」の場合つて……どいつ言つたひ

『 · · · あー · · · 』

入院患者ならば『 もんの病室はどいですか』となるだひつ。
しかし、ちりは『 死人』。

まさか『 もんの遺体はどいですか』と、言つわけにもいかない。

「 あとこれ、どこに聞けば · · · 」

『 あらー · · · · · 』

大きな病院と言つものは、総じて「 チヤ」「 チヤ」しているものだ。
受付らしきものは、今居る正面ホールからパツと見ても三つ。

それは、紹介患者窓口と、保険証提示の受付と、支払いの受付な
のだが、病院にあまり縁のない、健康良男児の藍にはその差がよく
わからなかつた。

さらに良く見れば、図書館にあるよつな、病院配布のカードを提
示して予約等を確認できるコンピューターなんかも入り口脇に並んで
いる。

この短い人生に何度も来ているはずなのに。未知の空間に藍は
うろたえた。こんな時に限つて、病院職員は歩いていない。

『 · · · · その辺の人訊いたら?』

「 そつ、でもつ、病院に來てる人つて言つて、どの人も眞合が悪い
んじや · · · · 」

『 そう? 意外に元氣そうな人もいるよ? ほらあのお爺さんとか、お
年寄りはいけそう。あと付き添いで來てる人とかさあ』

「 · · · わかりました。ちょっと訊いてきます」

藍は緊張の面持ちで歩いていく。

『がんばれ藍ちゃんフレーツフレーツあ・い・むちや・ん』梓は手を振つて見送つた。

やはり、ああこいつ反応になるのも、自分の外見を自覚しているからなのだろう。

突然現れた外国人にしか見えない少年に、声をかけた優しげな婦人は遠目から見ても驚いていたが、しばらくすると難なく藍は、丁寧にお辞儀をしてから帰つてきた。

藍は人見知りだと思っていたが、さすが寺の息子。老人相手だと幾分気が楽だったのかもしだれない。

『どうだつた?』

「どこのに訊けばいいかはわかりました」

文字から色を見る少年

「山崎さんは待つて下さい」その言葉に頷いて、梓は順番待ちの椅子の端に座った。平日の夕方だから、勤め帰りの姿が田に付く。邪魔だからと追い払われた感が否めない。

兄妹だろうか。ふと、後ろの席に座る小学生の甲高い声の会話が耳に入った。

どうしてそんな会話になつたのか、首をかしげるような内容だった。

「『あじすせそ』は秋の文字だろ。だから秋の色なんだ」

「・・・ふーん。じゃあ、『あいづえお』は？」

「水色とか、朝の色ー。」

「朝は水色なの？」

「つたりまあだろ。空気が水色じやん。夜は紺色！で、夕方とか朝は青！」

「へー、じゃあ『かきくけ』は？」

「かきくけこも秋の色。あつでも、さしすせそは枯れた木の色で、かきくけこはこよーの色」

「赤とか、きいろ？」

「んー・・・あと、ぐだもの色ー。」

「たちつてとは？」

「みどり。夏のはじめの、ん〜・・・じぢゆくらー」

「木の色？」

「葉っぱの色。夏のはじめのこと、初夏つてゆうんだって。だから

「初夏の文字」

「なにぬねの」

「むらわせとオレンジ」

「ふたつ色あるの?」

「なにぬねのも秋!」

「どう違うの?」

「なにぬねのは今『ひー』。じゅーいすけ円。『もつかべタですよー』。つて感じ『なむね』はむらわせだけど、『こ』だけオレンジ。五個全部おんなじ色じゃねーもん」

「違うの?」

「あこいつえおも、『え』だけきこる。他もおんなじ水色じゃなくつて、ちよっとだけ濃さが違う。

えつと、学校の帽子とかじやなくてチュークの黄色みたいな薄い
あこる」

「違うの?」

「水色はあ、えーとつ、チームカラーなんだ」

「ねーねー春の文字は?」

「『はひふくは』と『あこひくは』と……あと『やむは』ー。」

「『わをん』は?」

「それはお正円」

「『まみむめもは?』

「一円。外」

「『ひりるれる』ー」

「夏ー」

「なんで?」

「『ひりる』に『れる』つてすると墨をうだかひ

・・・・・意味分かんない

「なんでだよーこつ、ふいんきが

・・・・・ふんいきだよー

「なんでだよふいんきつこつばじやーん」

男の子の方がむくれた声を出した。女の子の方も納得がいかない
ように唸っていたが、そのうち「せいこーくんがそれでいいなら
いんじゃないの」と言った。

小学校低学年くらいだろう。「男の子はいつでもちょっと馬鹿だ。

「あつ！そーだあつちゃん、」の前であ、おれのワーノコがアリゲ
イツに進化したんだ！」

とたんに機嫌を取り戻した兄に、妹が小さく溜息を吐くのが聞こ
えた。

「・・・小学生怖え」梓は思わず、聞こえもしない声で呟いた。

あの兄妹の、主に妹の方の数年後が不安になる。

いや、案外自分もあんなもんだったかも知れない。梓は苦笑して、
もう一度兄妹の微笑ましい会話に耳を傾けた。

「は？」

窓口の事務員が、思わず、といつたふうに声を漏らした。

「あの・・・ですから、三日前に交通事故に遭った、あの、山崎
梓さんの、」

質問をそのまま言つたのが悪かったのだ。事務員は眉を下げて、
困惑したように藍を見返した。

(・・・言葉がよくわかつていないと思われてる)

胃のあたりから湧いてくるような嫌な汗と、あの感情が吹き出し

てくる。藍は慌てて蓋を開めた。
「ですか？」その時だった。

「ねえ今アンタ、『交通事故に遭ったママザキアズサ』って書いた
よ
ね

肩に置かれた手。一拍置いて、藍は振り返つて相手を見た。

文字から色を見る少年（後書き）

せこじょうくん（7歳）

周 晴光くん。ポケモン好き。背の順で一番後ろのが白模。

あいちやん（6歳）

三浦 朝子ちゃん。マリオやぷよぷよの方が好き。正直こいつと趣味は合わないと思っているが、自分の方がお姉さんだし（精神的に）、長い付き合（幼稚園から）なので遊んでやつていて主張する。

感覚で生きる少女達

「ヤマザキアズサって、山崎さんのことだよね？」

そこには藍よりも頭半分ほど背の高い少女が三人、藍を囲むように立っていた。「Y女子の山崎梓さんだよね？」

少女は綺麗に数センチずつ大中小と背の高さが揃っていた。藍がそつと小さく頷くと、真ん中の一番背の低い少女が言つ。

「アタシは、山崎さんのクラスメイト」

「はあ・・・・」

垂れ目で柔らかい外見に反して、はつきりとした口調で彼女は藍を見下ろす。「ほひあ、やつぱりね。山崎つてわあ」後ろの『大』の少女が隣の『中』に言つた。

「山崎さんのことだけちょっと話したいの。いい？」

口を開き、早口で終わると同時にピッと唇を真横に引く。藍にはそれが必要以上に威圧的に見え、また頷いた。

見れば、窓口の事務員が、露骨に迷惑そうにしかめつ面をしている。藍は慌てて、窓口脇の椅子に移動した。

梓の座っている場所も見えるが、あの呑気な幽霊はいついつらと舟を漕いでいる。

「ねえー、こいんちよどじうこうの関係？ 親戚の子？・・・まだ中学

生だよねえ。学ランだし

「・・・・・友人で」

「ちょっととなっちゃん、怖がつてゐるよ」の子。アンタが怖いから

「ひつどい。口づくないしー。・・・・あ、いいんちょっと、山崎さんのことね」

「本当は委員長じゃないんだけどさ。あの入って、小中と五年連続図書委員なんとしてた伝説があるから」

「あつー！その制服式中じやね。アタシも式中出身～」

「・・・・ちょっとアンタうるさいわ」

「うるせくなこしー」

「いや本当うるさいよ」

「なっちゃん、ちょっと黙ろうか」

「ひつどいわあもうー西藤ちゃんまでつー！」

中が大を引つ張つていぐのを見て、『小』はわざとじりじり息を吐いた。

「ごめんね。あの子頭コルくてさ」

「あつ・・・・いえ」

「アタシ、酒氏ミヅキね」

「坂城です。式中の一年です」

「あら一年かと思つたわ。」めんね

ミヅキはニヤッと笑つた。『・・・・・いえ、よく言われます』藍はそう言つしかない。

「ウチつても、ほら女子高だから、男子に飢えてんのよね。あの子なんか、彼氏と別れたばつかだから、『次は年下よー女光源氏になつてやる』なんつって」

『ひいつたことに疎い藍には、気が遠くなる話だ。高校生と言つのはこんなものなのだろうか、と思つた。』

「君さ、弄くりまわしたくなるつて言われない?」「言われません」

「即答?・・・怪しいなあ」

ニヤニヤ笑いを張り付けたまま、ミヅキは頭を搔いた。
「んでね、話つてさ。やっぱ山崎さんのことなんだけど」

「・・・・・」

ミヅキの顔から笑みが消える。じめらを見る黒い田の色の濃さが、
心なしか増したような気さえした。

「山崎さん、何で落ちたの?」

藍は首を傾げた。(それをなんで自分に訊くんだろう)

「周りは自殺やらなんやら言つてつけど。ありえないんだよね、
あの人有限つて」

「・・・・・・」

「あの人世渡り上手だもん。 - ちょっと恥ずかしい話なんだけ
どさ、アタシらグループつて、ちょっと居場所無いのよね。
アタシ短気は損氣を体で表したこんなんで空氣読んで話すつての
苦手だし、なつちゃんはアタシよりKYな上に、いつもテンション
高いし、西藤ちゃんは何考えてんのか分かんない子だし、ハズレて
んのよ」

そういう彼女は、口を尖らせ、まるで拗ねたような顔だった。

「山崎さんは偏見無い人で つていうより、あんま学校に興味
が無い人でね。」

いや、学校つていうより、学校行事と学校の人間に興味が無いの
かな。目標があつて入つた人っぽいから そんなだから、ア
タシらグループと他のみんなとの大事な橋渡しの一つだったの。

うん、本人意識してなかつたみたいだけど、すつごい助かつてたのよ、地味にね。『楽しむ時は楽しまなきやソーン!』って考え方だつたし。

縁の下の力持ちつて、ああいうのなのね。いや、能あるナント力は爪を隠すつてやつなのか、完璧主義なのか……仕事を与えられると、きつちりしてくれるので。普段は地味なのよ？　本当に。あの日もや・・・大活躍だったの。あ、アタシらからしてみれば、だけど。

ちょっとクラスの派手なグループとモメてね。どっちが悪いかっていうと、確實にアツチだし　でも多勢に無勢つて状態で、腹が立つて腹が立つて、どうしようもなくなくなつちゃつて。

普段大人しい西藤ちゃんまでさ。ぶっちゃけ今も腹が立つんだけど。そこを、　ま、山崎さん一人じやなかつたけど、フainプレーは間違いなくあの人ね。うまいこと納めてくれたのよ。『そういうことは心に収めておくもんでしょう』って。

正論つて大事だわ。そりや『正しい論』だもんね、まあよく口が巧いわ。うつかり百合に走るかと思つたもん

「冗談混じりの口調とは裏腹に、彼女の面持ちはどんどん険しくなつてくる。

「山崎さん、帰宅部だから、そのあとすぐ帰つたの。本当だつたらもつと早くいつもは出てるんだけど、そのせいでちょっと遅かつたのよ。だいたい三、四十分くらい。

わかるでしょ？　あの人自殺とかする人じゃないの。目標があつて、いつも学校には『行かせてもらつてる』って言つてた。ウチ金持も多いから、家のために親のために、学校『行つてやつてる』とか言う奴、結構いんのよ。馬鹿よね。

いつもと違つたから落ちたのか。それなら責任はアタシ達にあるわ。

・・・ねえ、その時のこと、教えてよ。アンタあそこに居たんでしちゃう？　・・・馬鹿な喧嘩、買わなきやよかつた。アホ共には言

わせときやよかつたのに。山崎さん目立つの、嫌いなのに頑張つてくれて。田が覚めなかつたら、恩返せないじやない・・・・・

ミヅキは涙田でこらえる様に下唇を噛んで俯く。視線を感じ、売店を見ると、離れたそこから見守るように一人がこちらを窺がっているのが見えた。

そういうことか。彼女らは何処からか、自分があそこにあの時居た目撃者ということを知つたらしい。

しかし妙な気分だつた。藍にとつて梓とは、まだ出会つて三日の変人幽靈だ。彼女の言うような地味な優等生ではない。出会つてまだ三日。藍はまったく梓の人格をつかみ切れていなかつた。子供っぽくてハイテンションで、ジョークが好きで、雑学をひけらかす変人。それだけだ。

この時点で親兄弟の事を何も言わない彼女を、親不孝とすら思つていた。

『親に行かせてもらつてる』

『親のために行つてやつてる』

はたしてどちらが普通なのだろう。確かに学費を払うのは保護者だが、今高校と言えば必ず行くものだつた。だつて高卒大卒でも就職出来ない時代なのだから。

藍は複雑な心境で、おずおずと口を開いた。

「実は僕、あまり見てないんです

「・・・・見てない?」

「僕は山崎さんの後ろを歩いていました。けど、クラクションの音

とかでやつと、気が付いたくらいで……」

「……でもあの歩道橋、めっちゃ幅狭いじゃない。せいぜい一メートルちょっとでしょ？ 後ろつて、どうくらい離れてたのよ！」

「五、六メートルか……それくらいですね。通学路なので……下校途中はあまり人を見ないんです。山崎さんが落ちた方向はネオンがきつくて、眼がチカチカするんで、いつも反対側を見て歩いてたんですよ」

「変なの。進行方向見ればイイじゃない。……でもまあ、そういう人もいるか。うん」

納得した。ありがとう。時間とつて、「めんね。そんなわけはないだろうに、そう言つマジキは調子を取り戻したようだつた。今度は柔らかく笑みを乗せ、人当たりのいい雰囲気を醸し出している。

「ほりこつまで漫画読んだんのーなっちゃん行くよー！」

「……え、ええ、理不尽だあ。読んでんのは西藤ちやんだもん」「西藤ちやんも！」

「……ちよい待つて」

「ありがとね！ 坂城くん。あ、ねつだ、山崎さんの病室なら、一緒に行つてあげんよ。どう？」

「……え？」

藍はぱちりと目を瞬いた。

数秒かけて、言葉の意味を噛み砕く。

「え？」

梓は今や、誰も居ない椅子数席を陣取つてすうすう寝息を立てていた。枕元に置いた眼鏡を踏みそうで、危なつかしい。そもそも眼鏡をはずす必要性があるのかはわからない。

「まだ眼は冷めないけど、さっきアタシらも見舞つてきたし大丈夫でしょ！ほら行くよ」

ミヅキの声が急かした。

「…………ええ！？」

藍は思わず頭を抱える。

(・・・生きてるじゃん止歸さん…)

感覚で生きる少女達（後書き）

なっちゃん

大。末っ子氣質のムード メーカーだが、意外に纖細。茶髪のパー
マ。

西藤ちゃん

中。端正な顔立ちの中世的な美少女。黒髪ショートカット。マイペ
ース不思議系。実は一番凶太い。

酒氏 ミヅキ（みづきん）

小。茶髪ボブ。たれ目の童顔、口リで隠れ巨乳。子リスの様な少女
だが、我が強く短気で姉御肌。面倒見がいい肝つ玉お母さん。

「…………ちょっと、ねえ」

梓は声と共に肩を揺さぶられて目を見ました。寝惚けたままの頭のまま、かろうじて目の前の人影を視界に入れて起き上がる。「起きた？」人影は、梓の顔を覗き込んで首を傾けた。傍から見ると、キスをしているように見えるかもしれない。

『…………おはようございます』

「…………君のお友達、行っちゃったよ」

ぼやける視界に、梓は傍らの眼鏡を手に取った。
「いいの？君のこと、ばれちゃったみたいだけど

梓の横に腰を下ろした少年は、呆れを滲ませ体の前で腕を組む。梓は寝癖の付いた頭を搔き搔き、少年を見やつた。

『何、見てたの。君、靈感少年？』

瓜実顔に色白の、中性的な雰囲気の少年だった。一見は黒い髪に黒い瞳の典型的な日本人に見えるが、どこか浮世離れした異国風の雰囲気もある。生来のはずの黒があまり似合っていない。
「…………まあね。はじめまして、小嶋凜つていいます」

『絶賛幽体離脱中、山崎梓十六歳です』

自己紹介した少年に梓はこんな感想を持つ。

(・・・・あら美人さんだわこの子)

右手を差し出すと、淡々と真っ黒の瞳で「ちり」を見てくる少年は、小さく笑って梓と右手を交わした。

まーばれたらばれたで、別にいいんだよね。ボク、い
つちども藍ちゃんに自分が死んだなんて言つてないもん。

あの時、撥ねたのも轢いたのも、軽自動車だつたしさ。足は骨折したし、打撲もしたし、頭も打つたけど、そう大したものじやないの。内臓は無事だつたし、背中は打たなかつたから後遺症も無いし、信号があつたからスピードも出てなかつたし、何より処置が早かつた。現場からこの病院すぐだし。不幸中の幸いってやつ?』

梓はあくまで楽観的に笑い飛ばす。凛は僅かに驚いた。

(・・・恐怖は無いのか?)

あの高さから走る車の群れに落ちて、さらに体から離れて。あの場を最初から最後まで、しつかりとこの田で見ていた凛は、まじまじと彼女を観察するよつに見つめた。

『あとは体が目が覚めるのを待つばかりよ。あと一、二日かかるでしょ。もつこいつなつたら、靈体って言ひのを活用しようと思つて

卷之三

何かせりたしことでも？

『まあ別に、体あつても出来る事だよ。やろうと思えば。・・・・・でもさあ、ほら、君みたいな人じやないと認知されないって、そう

ないじゃん？』

「幽体離脱つて、そんなもんなの？」

「ボクはそうだつた。・・・・見えたのは君と、あの坂城つて子だ

け

恐らく
梓には、体が『起きる』その時は分かるだろう。大

丈夫だという、根拠のない自信があった。

体は安全だ。またもう一度、あの足で立つて歩く時が来る。そしてそれはそう遠いものではない。それまでに・・・・『犯人探し』をしよう。梓は眼がさめるまでのプランを頭に描く。

藍は今、梓にとって最大の容疑者だ。彼が素直で眞面目な人間ということは知っている。しかし、動機など、被害者である自分には推し量れないのだ。

「・・・・わるい顔。今キミ、すうごい悪人ヅラしてるよ」

『あらやだ』

右手で口元を押さえておどける。現実離れした雰囲気を持つ少年

に、梓は少し興奮していた。

『・・・・なんでボクに話しかけたの?』

「教えてあげた方がいいかなってお節介と興味。俺、君見てちょっとびっくりしちゃった」

『え?』

凛は人差し指を口の横に立てて目を細めて笑った。

「・・・・・山崎さんがちゃんと人間に見えたから」

『・・・・・どういう意味?』

「そのまんまの意味。俺、妹以外は人間に見えない人なの」

『・・・・・』

梓は一瞬、動きが止まった。『・・・・・特殊な趣味の人?』

その反応に凛はまた笑う。

「性的対象じゃなくて。シスコンは認めざるを得ないけど」

『へー・・・・・そつかあ』

「うん」

『仲いいの?』

「・・・・・うーん。微妙。でも喧嘩はしたことないな、似たもの同士だから」

ふと、凛は藍達が消えていった通路を見る。

「うちの妹、可愛いよ」

『まあ、君の妹なら可愛いだろうなって予想が付くよ』

「・・・・・ふふ」

満足そうに凛は立ち上がり、梓の前に立つた。驚いたように梓は凛を見上げる。

「ねえ、俺も今、ちょっとしたこと計画中なんだ」

『・・・・・』

何故だか口をはさむのを憚られて、梓は黙つたまま凛を見つめ返す。凛は無表情だった。

「久しぶりに人間が見れて嬉しかった。だからキミに話しかけたんだ。俺、本当に妹以外は人に見えないんだよ。何故だろう?今の君は幽霊だからかな」

淡々とした口調で凛は続ける。

「これは呪いだから、もうすっかり慣れてたはずだつたんだけど。ちょっと嬉しかったんだ。俺も自分で自分にビックリだよ。さて、

山崎梓さん、

『・・・・・』

「犯行予告します。俺、小嶋凛は明日、化け物を一人倒します。その後、俺達兄妹に呪いをかけた魔法使いを殺しに行きます」

梓は今度こそ金縛りを受けたように硬直した。

『さて 僕は化け物を倒したら貴方にわかる方法で伝えましょ。化け物を倒すのは最優先事項なので、魔法使いは絶対にその後になります。もし、貴方が魔法使いなら、貴方はどうなるかわかりますか？』

凛は梓に人差し指を突き付けた。

「次に会うときは、君が魔法使いだつた場合と、君の体が目が覚めた時に、俺が会いに行く場合。約束しよう。君の体が目覚めたら、俺は必ず君に会いに行く。違つた場合の時は謝罪させてほしい」「それだけ言うと、凛は一步後ろに下がり、眺める様に梓を見てから、呆然とした彼女を置いたまま出口に歩き出した。外はすでに暗い。

「じゃーね」

最後の一瞥。その一瞬で見えた瞳の色に、梓は跳ね上がるよじこで椅子を蹴つた。

病院の明るい照明がはつきりと照らしだした。あの浅黄色

薄い青の瞳。

梓は凛の腕をつかもうと手を伸ばす。

「あ

『 つな』

するりと梓の手は空を掻いた。凛はすり抜けた自分の腕を、梓を見ると、顔をしかめてまた歩き出した。

『つ待つてー待ちなさいよー』

『ちょっと待つて！』

『アンタでしょ！私をあそこから落としたのー』

『ねえ！アンタのその眼、覚えてんだからー』

『ねえちょっとー』

『待つて言って』

凛はもう一度も振り返らなかつた。

追いかけることも考えたが、頭をよぎった考えに梓は足を止めざるを得なかつた。

(もし追いかけたとして、この体で何が出来る？)

彼は何だ。自分がその『魔法使い』とやらだとthoughtから落としたのか？だとしたらとんだ人違いだ。迷惑も甚だしい。

どういうことだ。何故自分はその『魔法使い』とやらと間違えられた。何故彼はそう思つたんだ。

自分は何かしたのか？『呪い』って、なんだ。

(呪い？)

まさに、自分のこの状態もある意味では、呪いのようではないか？自然の中ならまだしも、人工的な灯りの多い街中では星など見えず、いつもどんよりと霞がかつた紺色の空が広がつてゐる。その様子は感動などには程遠く、ただ不安になるだけだった。
誰にも見えない。聞こえない。触れられない。

戦慄する。

そこで初めて、猫被りの少女は本氣でこの状況を自覚し、恐怖した。

(・・・・ぢづじょつ。私、独りぼっちだ)

魔法使いを呪つ少年（後書き）
(あかまき)

小嶋
人魚。
シスコン。

ビデオテープを巻き戻せ

藍は横目で梓を見た。

梓は相変わらずだ。先ほどから、藍のベッドの上で背を向けて寝息を立てている。

(よくもまあ、他人の部屋で・・・)

呆れつつ、ふと、幽靈に睡眠は必要なのだろうかと思つた。いや、ただの幽体離脱とわかつたから生き靈か。

睡眠は脳内でその日にあつたことを整理するため、必要だという。夢を見るのは、その日に会つたことを再生していくためだと。

梓は意識も蓄積する記憶もあるのだから、当然、睡眠も必要なのだろうか。いやでも、肝心の脳の詰まつた体は数キロ先の病院だ。

「・・・・・」

今、時刻は夜の十一時。当たり前だが、外は真っ暗、夜だ。窓には数多の雲が貼り付いては落ちていき、何も見えやしない。

あの後、病院から帰つたすぐ後に雨が降り出したのだ。しつとどこりではなく、風も相まってザアザアと屋根まで突破し窓に討つてくる。

(・・・・ そろそろ寝ようかな)

明日の朝は早いだろ？この雨では登校前にもたつくかもしれな

い。

じゅぢゅ、梓の体はこぢらが視覚的に認識してやり、触るひとつで
なければ触れられないものらしい。意識の落ちた梓の肩を軽く揺ら
してみたが、彼女はまるで死体のように この表現は悪いか。
まるで泥のように眠っていて、ピクリともしなかった。
仕方ないので、梓と背を合わせる様にして横になつた。電気を消
す。

(明日、山崎さんと話してみよう。うん)

少しの譲歩。こういったことは苦手だけれど、誰でもやっている
ことだ。自分にも出来ないわけがない。

彼女はきっと、訊かなければ言わないのだ。

ノイズだらけのカセットテープ

チカチカとする視界に、凛は光る瞳を抑えるように手を当てた。

空が赤い。夕日では無い、朝日だ。この暁の中なら、恐らく自分の目も目立たないだろうと、右手を脇に下ろした。

高台からは、あの男がゆっくりとこひらに上りてくるのが見える。
青島草平。

三十八歳の国語教師。かつての自分の担任だった男である。そして、凛が学校から追い出した男だった。
いや、実際手を下したのは学校側だ。凛はその原因にすぎなかつた。

セイレーンという力が、凛にはある。

自覚したのは十四歳、中学二年の時。一年前だ。それは基本的に『人に愛される』能力だった。凛が自覚する少し前、中一の夏まで青島は担任だった。

見方を変えれば　　そう。うつかり凛の能力に飲まれた犠牲者である。

凛は最初で最後、彼を犠牲にしてこの能力を自覚し、制御できるようになつた。

凛にとってそれは哀れだと思いつつも、大した問題では無い。この数年でわかつたことだ。

セイレーンは、漏れ出した程度では誘えない。

つまり、この男は少なくとも心の奥で、そういうことを考へる

人間側だつたということだ。セイレーンはきつかけに過ぎない。この男は、自分の意思でそういうことをする、または考えていた男だった。

ゆつくりと瞬きをする。それだけで凜は自由に瞳の色を変えられるようになつていた。

「お久しぶりですね、青島先生」

「・・・・・ああ」

二年前より老けている。

顔全体がたるんでいた。余つた皮が深い皺を刻んでいる。疲れたような顔はしかし妙に脂ぎついて、呪いの分を差し引いても、凜には十一分に不快に見えた。

顔色は変わらないが、そわそわと落ち着かない様子で、青島はその場を見渡す。この男は一年の間に、すっかり小心者になつたらし。一年前はその場の勢いがあつたとしても、随分と大胆だった。むしろ大胆すぎた。失敗から少しは学んだのだろう。

青島は背は低いが、その分横に大きい筋肉質な体格をしている。柔道の有段者、との噂だった。

(・・・・・まあ確かに人を押さえつけるのは上手かつたよな)

噂は真実だ。凜は身を持つて知つている。別に寝技だけが得意なわけではないだろうが。

どうも、こんないつ人が来るかも分からない場所ではなく早く屋内に入りたいような様子だが、それでは意味がない。

・・・・さて、問題なのは、こいつがそういう趣味の人間だとして、守備範囲はどれほどのものか、ということだ。凜は同世代にしては細い方だとはいえ、この男同様、この一年間の成長期の間で様子も変わっている。

だが。（・・・まあ関係無いか。）

こちらはもう一年前とは違う。その程度、問題では無い。
凛が大切なのは妹だ。

両親は共に健在だが、凛にとつての家族は妹だけだった。

（それが 今度は妹だって？）

人魚は魔法使いに呪いをかけられました。
まわりはざらりと並ぶ何かです。人は人に見えません。
ただの何かに見えました。
魔法使いはこれを魔法だとされました。

人魚は幸せになるために魔法使いに頼んだのです。

どうかどうか、あの地を踏む足がほしい。の人と
踊る足がほしい。

こんなことなら足なんて要らなかつた。

こんなことになるのなら。こんなに苦しむのなら、ただ変わらず、
全部忘れて、離れて静かに暮らして居たらよかつたのに。

何故あの子は、妹は足なんて望んだのか。

尾ひれでいいではないか。

踊れなくとも、波を感じながら泳げれば。

それでいいじゃないか。

くやしいくやしい。

何故彼女は自分などに会うために、そんなもの望んだんだ。

彼女は足の代わりに尾ひれを、水中で息をするためのHリウを亡ハシしたのだ。

たつた一人の兄妹だ。それなのに。

それのために呪いなんて二人揃つて掛けられて。

二年経つて、ようやつとなんとかなるようになつたんだ。

それが。そんな時に。

お前があいつの王子様？

あいにく、俺の眼にはお前は人じゃない。化け物に見えるさ。お前が妹に愛される？馬鹿を言ハラハラうな。妹も同じ目を持つてるんだ。

せいぜい偽物に騙されればいい。

今俺は妹の贋作だ。そんなものでも満足できるんだろ。セイレーンに引っかかったのが青島だつたのも、青島が妹の学校に赴任してきたのも、たまたま妹がその生徒だつたのも、青島に眼付けられたのも、全部が全部偶然だ。

いや、もしかしたらこれも魔法使いの呪いなのかもしれない。しかしそれでもいい。

凛が妹を守るためにこつすることとは、どちらでも変わらない。

全部が終わつたら、魔法使いに感謝してやるよ。

この魔法が、力があつて良かつたと始めて思つた。

人相手ではなく、化け物相手なら。そしてセイレーンの力があつたから。

皮肉にも、こうして妹を守る術があることが嬉しかつた。

(青島が俺を掻き抱いた。息が荒い。相変わらず、タガが外れると妙に大胆だ。先程までは落ち葉の音にも、肩を揺らしていたくなぜに。)

近づいてきた魚の首を、思いっきり取つた。

(襟首をつかむ。肉厚の腹に膝が沈んだ。)

押す。

(落ち葉に滑り、青島は足を折つた。バランスを崩す)

その先には、つらづらと続く、階段が

・・・・

(西の空に残つた星が、
綺羅綺羅と輝いていて

)

懐かしの復興版ブルーレイ

『朝は空気が水色だから』なるほど、言われてみればそうかもしれない。子供の発想というのは、嬉しいものである。それとも、あの少年が特別、感受性といつものが豊かなのだろうか。

『藍ちゃん朝早いねえ、いつもこんななの?』

「・・・今日は特別ですよ。起こされたんです、山崎さんは寝てましたけどね。あと藍ちゃんはやめてください」

『じゃあ呼び捨てにする。いい?』

「お好きにござります!」

右手にチリトリ、左手に竹箒を引き摺つて藍は境内を歩いていた。夜のうちに雨は降り切ったのか、地面に水たまりを残し空は晴れ渡っている。しかし雨は、水たまり以外にも多大な被害を残していた。

「くそ・・・もう少し降つてくれてればよかつたのに」

境内 つまり藍の実家、坂城家の家長が住職を務める寺院

内だ。早朝から藍が駆り出されたのは、昨夜の雨で落ち葉が一気に落ち、境内を雨にもまれた落ち葉でいっぱいにしてしまったためだった。

とりあえず、寺の玄関と言える境内の正面から石段までを一掃してくれればいいとの母のお達しだ。寺営業はまず、境内の清潔感からだというのは坂城家の家訓である。

かくして藍は、登校前の早朝から庭掃除に繰り出したのだったが。

『これは酷い』

状況は予想以上。高台にあるこの寺は、街のはずれなのでぐるりと木に囲まれている。すこし降りれば、ちょっとした林だ。

椿などの常緑樹もあるが、基本的に正面は花と紅葉が綺麗な落葉樹が植えられている。父いわく。『その時の姿の移り変わりを楽しむのが日本のいいところ』。（栗毛で瞳がヘーゼルの袈裟姿の男が言つて、とってもシユールだと息子は思つ）

・・・・・まあつまり。

ここはとくに落ち葉が多い場所なのである。

さらりに雨の水分を纏つた落ち葉は、糊にまみれた紙屑の様な始末で、べつとりと地面に貼り付いている。なぜ朝からこんなに憂鬱にならねばならない。まだ朝食も食べていないのだ。しかも今日は特に寒い。

『アイ、寒くないの？』

「山崎さんを見るだけで寒いです」

『えつ？何？原因ボクかい？理不尽だねえキミ。女子高生の生足なめんなよ。ハートが熱いから皮膚が麻痺するんだ。凄いだろ』

『それもう危険じゃないですか・・・・・』

呆れた風に半眼でねめつける藍に、梓は得意げに続ける。

『男にも言えることだよ。ほら、クラスに一人は居るだろ。一年中半袖短パンで頑張るやつが

『絶滅危惧種です』

『えつ！ボクの時は大山くんと大沢くんっていうアホ一人が居たよ！？・・・・・まずいな。数年の間に時代は動いてる・・・・・まさ

かそんな小中学生にまで草食男児化が進むなんて……』

「ああ、小学生だから、草食男『児』……」

『やうやう・・・・つていうか、今日はなんとかよく話してくれるね。いつも無視してゐるのに』

大袈裟に驚いてみせる梓に背を向け、箸を手に取り藍は言った。

「別に・・・・今誰も居ないから」

『はあ、なるほど。誰も居ないとひるに話しかけて、気味悪がられる主人公はセオリーだよね。実によくあることだ』

藍は今まで頭の中だけだつた言葉を口に出しただけである。
まだ梓を成仏させようとしていた一日までは会話もあつたが、三日には早々藍は諦めてしまったのだ。
一日間。その時は知らない女の子と共に居ると藍の緊張と、遠慮言えなかつたことも上乗せして口に出した。

なんと言つてもまだ四日。藍にしてみれば、これは精一杯の讓歩である。【被害者】と【目撃者】ではなく、友人という関係に繰り上げしなければいけないと云つ思いを、藍は感じていた。

『・・・・耳赤くない?』

「別に寒いからですよ」

『アイは即答する癖あるよね』

そんなことはない。とは言い切れない。何せ昨日、酒井ミヅキに同じようなことを言われたばかりだ

『妖しいなあ』とのニヤニヤ笑いを思い出しおもひとする。いやなものを感じ出してしまった。

あの日のあの時の瞬間

藍はお返しの様に、梓を仰ぎ見た。

「山崎さんは、自分が生きてるって自覚はあつたんですか？」

『・・・・ボク、一度も自分が死人だなんて言つてないよ。』

予想はしていた答えである。

実に彼女らしい、茶目つけ溢れる返答ではないか。

悪戯つ子の様に歯を見せて、梓は笑つた。

『あら、大きな溜息』藍は急激に一十年ほど老けよつた氣がする。梓の笑顔は眩しい。眩しそぎて、目眩がした。

この目眩は、決して彼女に見惚れて発生した症状では無い。強いて言うなら、交際半年の恋人のベットシーンを直撃してしまったような、どちらかといえばそういう裏切りにとそれによつて途方に暮れた方の『目眩』である。

やけくそで箒を猛然と振る。力いっぱい地面を擦り上げた小枝が、落ち葉を剥がしていく。

(ああ腹が立つ!)

チクショウ!なんて、普段使わない言葉さえ口から出やつだ。やっぱり馬鹿にされているのかもしない。

彼女はやつぱり変人だ。しれっとした顔で、『だって訊かれなかつたもん』。

(訊かなくても言えよー) 成仏させよつとした自分がまるで馬鹿ではないか。やつからずつと筆を振り回し、落ち葉の山を創つていく。

『あれ? そつちもやるの? 階段までしてたら時間なくなるよ』

「・・・・・」

やめせない、とはいつひこひことを言ひのだろ。藍は真面目であるからして、最初は普通に幽霊の言葉に耳を傾け、普通に彼女のためにならうと頑張り、普通に彼女のため考えた。いくら好かない相手でも、彼女は自分にしか見えないわけだから自分がやるしかない。そう最初は確かに思ったのだ。

馬鹿みたいに一生懸命になつたかつての自分にも、何も言わなかつた彼女にも腹が立つた。彼女は影で笑つていただろ。頭の中で馬鹿にしていたと思ひ。『アイツまだ勘違いしてるよ馬鹿じやないの』

友達の成り方は知つていぬ。『ヨコハマヨウケーションだ。藍だつて友達作りくらじできるし、やつてこる。しかし得意な方では無い。

友達にならなきゃいけないと思つた。一緒にいるなら【信頼】が必要だと思った。最初に諦めてしまつたのはこいつだった。だから。

いづからまた歩み寄らなくては

プライドはズタズタだ。

(・・・・弄ばれた)

『ひつ、人聞きの悪い子と言わないでよ！なんかそれじやあ君を騙くらかして絞り取るだけ絞り取ったあげく、街金融で借金させて、金だけ持つて逃げた男みたいじやないか！』

「人の心を覗かないでください…』

『だあつ！そこは、「最初一文は間違つてないじやないですかつ！」つてツツ「むとこりでしようよ…』

「そりですよ間違つてないでしよう…今僕はそんな気分なんですよ！」

『うつ・・・・』

梓は半歩下がり、うつむいて小さな声で言った。『・・・・ごめん』

『出来ないんだつたんだ。魔が差したというか・・・・アイがあまりにも一生懸命してくれてるし・・・・まあ、三田田にはもう、放置プレイだつたけど・・・・』

ぼそぼそと、口をとがらせて梓は謝罪するが・・・・

『・・・・・そうだ・・・・・そうだよ。ねえあの放置プレイも結構堪えるんだからね！ボクがどれだけ空しかつたかわかる？ずーっと独り言！寂しかつたんだからあもつつ…』

「（何が「もうつー」だ）謝る氣があるんですかアンタは

『だからもう、おあこひでことで許して下せー！ねつ仲直り…』

(・・・仲直りも何も

そもそもそんなに仲良くはないではないか。

藍はどこまでも自分に自信が無かつた。家族でも友人でも無い彼女に好かれている自覚など、今の彼には到底無理な話である。所詮は他人。ちょっとした偶然で、共に行動しているだけの存在だ。

それが。

どうしてそれをしようってんだ。『仲直り』仕様が無いだろう。自分は彼女が嫌いだし、彼女のことなんて何も分からぬ。分かるうしなかった。少し素直になつてみようと思つたとたんにこれだ。手は止まっている。

地面までの距離が遠い。

泣きそうだ。

捻くれた天の邪鬼は、零れそつな蒼い目で梓を睨み、唇を噛んで梓に向かって箒を振りおろした。『おひい！』当然、箒は奇声を上げる彼女の体をすり抜ける。

そのまま振り返らず、一気に階段を駆け下りていった。

あの声あの顔あの姿

・・・・さて、ここではアイ少年が彼女から姿を消せば、ありがちな青春劇である。

「大っきらいー」「ちよつ、待てよー」「うわーん」

なるほど、青春ドラマである。が、ここは語り部のボクから言わせてもらおう。現実、そつ恰好はつかないのだ。

まず逃げたところで、ここは彼の実家である。しかもぶつかった対象は、家族ではなく他人、彼がいなければ、この場所に何の縁も所縁もない人間。頭のいい彼は、階段に足を掛けた時点でその事実に気付き、さらに泣きそうになつた。

何が悲しくて、実家から逃げなければならない。そういうえばまだ朝ご飯食べてない。ああ情けない。阿呆か自分。なんで彼女は自分なんかに取り憑いてるんだ。病院に帰れチクシヨウ。

そうして混乱した彼は、失態を犯した。

重なる濡れた落ち葉。石段は滑りやすい。気づけば、ぐるりと一回転、石段から足を踏み外していた。

ボクはそれを上から見ていたわけだが、それはもうビックリの吉本新

喜劇

派手に、というわけでもなく、実に地味に滑つて転んで腰を打つた彼は、一瞬自分に起きたことに理解が追い付かず、眼を丸くして固まっている。見事な池やん十八番、ギャグである。

၁၂၅

二三の事

真っ赤になる顔。だから彼は面白い、転がった竹簾を握りしめ、
アイ少年は無言で羞恥に震えたのだった。

四
卷之二

「……………瑞子の少年フレイケンバーク」

五

藍は動かない。否、動けない。

(穴があつたら入りたい)なるほど。昔の人は的確なことを語つ。上から見下ろす梓にも腹が立つ。類は友を呼ぶ、というが本当だ。今の彼女はあの時の酒井ミヅキとおんなじだ。そんなに年下の男を苛めて楽しいか。

『くくく・・・ほら上あがひつか。朝ご飯食べなきや、一日は始まらないよー?ほらほら』

梓が手を伸はしてくる。緩んだ口元をなるべく見ないようにな
本意ながらその手を取つた。自分の失態に、逆に笑えてくる。

めめこた落ち葉はとても触れる
するりと石段の上の手が滑る
ものではない感触だった。

顔をしかめて、ふと、視界に入った手の平に瞠目する。

「・・・・えつ」

『ギャツ！何それ！』

流石の梓も叫んだ。

べつとりと、しかし粉の様にぼろぼろと端から乾いたものが落ちていく。それは明らかな

「・・・血？」

「で、こけて手をついたら、階段に血痕があったと」

「はい」

担当の初老の刑事は、小さな眼に半分目蓋をかぶせたまま頭を搔いた。

「・・・・こけた時に頭は打つて無いよね？見たところ」

古びた畳の客間。刑事は茶にも手を付ける気配は無く、朝の空気に熱は奪われていくばかりである。頼りなげに僅かに靈を漏らす緑色の液体の入った陶器は、右ビジの向こうに追いやられていた。

「・・・・腰は打ちましたけど」

「ふうんそう。で、お父さんは最後にここを見たのは？」

「昨日、一度畳に掃除したつきりですね。そのあと夕方から酷い雨でしたし、そのせいで落ち葉がたくさん落ちてしまつて。朝から息子に掃除させていたんですよ」

警察に受け答えする藍の父は、困ったよつて眉を下げるその仕草さえ、貴禄漂う人物だった。

堀の深い顔立ちに、きつりとした眉。栗毛に灰茶（ヘーゼル）の瞳と色彩は甘いのに、まるで任侠映画に海外マフィア役で出てきそうな雰囲気を漂わせている。仕事となること、これで袈裟を纏うのだ。

頭を剃つていないので、この風貌があるかららしい。なるほど、前髪を下ろすとやや緩和される気がする。

『そうだよねー、これで頭剃っちゃつたら、坊主と言ひよリスキンヘッドの怖い外人だもんねー』

身長は相手の警官の方が高いにも関わらず、その雰囲気に恐縮して、聴取は現場に遅れて駆けつけたベテランらしい刑事が応対していました。

「昨夜、乱闘などがあつたとかは？」

「寝てたので何とも言えませんが、無いと思いますね」

「ご家族は何人家族で？」

「母と嫁、大学生の娘も居ますが、それはもう家を出ているのでいません。あとは、二つの藍と私とで五人です。

「藍、お前はもうご飯食べて学校行きなさい」

「そうですね。そちらはもういいですよ」

どうも子供嫌いらしい刑事は、犬を追い払うような仕草で左手を振つた。それに藍はむつとした表情を見せたが、父の視線を感じて立ち上がる。

「・・・失礼しました」

梓は去り際にきちんとそつまつ藍に、僅かに感動した。（さすが寺の息子・・・）

「い」の家はなんでしょうか

辻は実際に楽しそうに、細い田をわりと細めて呟いた。俺に言つて
んのか？「えうですよ。今こそこ先輩しかいないじゃないですか

「住職、見ました？」

「外人だつたな、で？」

「いやいや、めずらしいなーって。出来るんですね、外国の方で
も」

「そりゃ免許があれば出来んだろ。あんま余所の家に、興味深々で
突っ込むなよ」

「わかつてます。わかつてますよお」本当に分かっているのだろう
か。

この新人の辻とこう男、どうにも緩い。タッパはあるくせにやけにヒラ口長く、まるで特大のエノキダケのようである。

一応スーツは着てきたようだが、朝早くに呼び出され急いで着たらしく、よれよれのしわしわだ。親か何かからのプレゼントだらうか。身の丈に合わないブランド品の、上等なものに見える。もつたいない。

「でも、先輩もこの辺地元なんでしょう？」

「地元つーか……」

廊下の向こうから、ちらりと学生服姿の少年が見えた。これから登校するらしい。俺の視線に気づくと、悪目立ちする金色の頭を下げて会釈する。随分と日本人らしいその行為に、こちらのほうが慌ててしまった。

「…………たぶんわざわざの子後輩だ。あの制服、見覚えがあんだ」

「めぐせへやせばへやじやなこすか。じやあこも知つてゐるんでしょ？」

好奇心に煌めく瞳。（しかしいかんせん、眼が細い）見上げなければいけないのもむかつく。文章ではわからんので正直に言おう。
俺は背が低い。（こいつよりガタイはいいけど）

「…………」の住職はハーフだよ。父親がフランス人、この寺は母方のほうの寺を継いだんだな」

「じゃあこここの息子はクオーター？でも、四分の一じゃ金髪碧眼はそう生まれないんですよ遺伝子的に。あの子まんま外人じゃないですか」

「同郷のフランス人の奥さんもらつたんだよ。その奥さんも、旦那の戸籍に入つたからもう日本人だな。仏系日本人一家なんだ。純粋な日本人は祖母さんだけ」

ふんふんと頷き、辻は言葉を続けた。

「すごい偶然ですね。あるんですねそういうの」

「それだけ日本が住みやすいってことじゃないの。義務教育があって、何だから言つて年金は出る。犯罪はあってもすぐ捕まるし、

衣食住には質のいいものが一般的に出回ってる。まあ、フランスも、国運営の託児所があつたりするから、子育てだと五分五分かもな。教育には力入れてる国だし。治安の面では日本には敵わねえだろ」

「今なんか、日本文化ブームですしね」

「そのブームが始まる半世紀前から、この家はこんな家なんだけどな。でもまー、共通点もあるからじゃねーの。日本人って、食と衣はすげえ大事にするじゃん」

「そうですよねー特に食べ物関係つて、問題起きると凄い怒りますもんね日本人。ちっさい祭りの出店でも国の許可居るし。五十年近く前なら、まだ女性も尽くし上手だし、そこに惚れたんでしょうかねー」

「・・・・俺も五十年前に生まれたかったわ。今の女は氣い強くて」
ふー・・・つと、長い溜息を吐く。

「ああ、そういう言こませんでしたけど、その額のん、彼女ですか?」

「ああそりだよ・・・・チクショウネイルって凶器だぜ。気をつけろよ」

「田ん玉くり抜けそうですね」

「言つなよ・・・・怖いだる」

「話戻りますけどー」足が疲れたのか、壁に背を預けながら辻は続けた。

「辺つて、高級住宅街ですよね」

「そりだな。暇な爺さんばあさんしかいねえよ。老後の金持ちの家が多い。あとは畠だな」

ベックタウンとして栄える辺の街は少し行けば高速道路にバス市電地下鉄と在るにもかかわらず、辺はまるで別世界の様に閑散としている。昼間も道を歩く人は散歩の老人程度だろう。この道に人が往来する時といつたら、近所の小学校の下校時間くらいである。当然犯罪率も少なく、あるといつたら空き巣程度だ。

そう考へると、寺営業のほつはやりやすいのかもしねい。

「周さんも、不良の乱闘とかは考えてないみたいですね」周さんと云ふ。
今住職と話してこむ上司である。「でもなんか、物騒ですよね、最近
近この街

「まあな。」ないだは女の子が歩道橋から車の群れに落ちたし

「わつそつわれですよ。あれ、自殺じやないんでしょう? 周さんに聞
きました」

「殺人未遂だよな、そつだとしたら。やだなア」云ううつらう
になるのは

「でもわつこのつて、重なるもんなんですよねえ。不思議なこと
に」

『不思議なのはお前の頭の中だよ』と口に出しゃつとしてやめた。

辻は予想よりずっと、頭がいい。知識も豊富で理解力も早い。それは日常に反映できないから馬鹿だけれども。

さつと言わなくても分かつてくれるだらつ、俺の普段の言動で。そつこの馬鹿には願つている。

最後に、辻はほほんとした声で言った。

「俺達、何か起つた後しか何にも出来ない愁傷な身分ですもんね
え」

これくらい呑気な物言いが出来るくらいが、ちょいびといのかもしれない。

「やつぱり、女の子にしておけばよかつた

兄は不器用な人だ。わたしの数段上、社交性があるように見えて、実のところわたしの数倍気疲れしている。

わたしは知っていた。あの人の笑顔は、その『社交的な』人の時だけのものだ。普段の、特にわたしの前のあの人は、どちらかといえば無表情で平坦な感情の起伏をした人物だった。

そこにわたしは、自分との共通点を見つけて嬉しくなったりするのだけれど。

兄はとてもめんどくさがりだ。

わたしもそうだが、興味のあることにしか全力が注げない。その分、好きなことはいくらでも集中力が続く。その他は本当にどうでもよくて、その姿は他には異常に見えるらしい。

嘘じやないの。好きなことは、いくらでもいつまでも好きなの。

そのためならいくらでも時間を割いたつていいの。

凛は、わたしに会う十四の秋までたつた一人の妹の存在を知らなかつたという。

凛とわたしは、まだ赤ん坊のころに両親の離婚によつてそれぞれに引き取られた。

離婚と同時に、わたし達は県をまたいで離れてくらすこととなつたのだ。

わたし自身は、定期的に母と会つていた。わたしを引き取つた父は、わたしが小学校に上がるころには再婚して妹も生まれていたけれど、それは両親双方の方針だったし、わたしは中学に上がるまで、半ば義務的にそれに従つていた。

そう、中学に上がる前である。それは小学校卒業祝いに会った時だった。

わたしは凛の存在を知っていた。父は、凛の存在を隠そとしなかつたからだ。ただ距離があるし、まだわたしには早いのだらうとその時まで黙つていた。

進学。その節目は、わたしにはとても都合のいいものに思えた。今なら言える。今まで黙つて従うばかりのわたしの、母への最初で最後の自己主張だった。

『凛に逢いたい』

それは思いのほか、大きな波紋をもたらした。きっとこの言葉は、囁らざとも母にとつても、切つ掛けになつたのだ。母は波紋の波がゆるゆると水面に融けていくように、実に自然に連絡を絶つた。

恐らくめんどくさかったのだ。その血を継いだ、わたし達兄妹の共通の意見である。だって自分たちにもそういう一面はあるのだ。こんなところで血の繋がりを感じたくなかった。

女のわたしではなく、男の凛を引き取つたのもそのためだ。恋人とのセカンドライフを楽しむには、相手と同じ男のほうが、何かと都合がつく。時が来れば女は金がかかることを、母は身をもつて知つていたのだ。

わたしは母の一言がどうしても忘れられない。

「やつぱり、女の子にしておけばよかった」

帰り際に朗らかに笑つて、わたしを抱き寄せ耳元で言つた言葉である。

「彼女は面倒だったのだ。邪魔だとさえ思つていただろう。息子を養い、娘に会うのは義務だった。そんなときのわたしの一言は、十分な理由になつたのだ。自分の感情と、成長した娘。「もう母親なんていらないでしょう?」そういうことだ。少なくとも、わたしにはそうとしか思えない。」

わたしは兄にどうしても会いたかった。きっと、凛もわたしの存在を知つていれば同じことを思つてくれただろう。だからわたしは十四の秋に会いに行つたのだ。

狭い部屋の中で十月十日、寄り添つていた同じ年の兄に。

「ミヅキ、休みだつて

「ミヅキ、休みだつて」

めずらしく険しい顔でなつちゃんが言った。

「・・・心配だね。ミヅキいつも元気なのに」

「精神的なじやなきゃいいけど・・・」

「・・・」

こればかりは何とも言えない。なつちゃんはケータイを開けたり閉じたり手で遊びながら、たまに開いて画面を覗き込む、といったことを繰り返している。パチツ、パチツ、と鳴る音が少しうつとおしい。

「なつちゃん、大野さん睨んでるよ」

「・・・んん・・・」パチツ、パチツ、

「・・・ちょっとウルサインんだけど」

大野まこと。彼女は、見るからに女子高生ギャルといった感じの子だ。普段はそんな気の強い子ではないのだけれど、なぜだかわたし達を目の敵にして何だかんだとつつかかってくる。

そう、あの日のことも、彼女たちのグループとのトラブルが原因だった。彼女はクラスでも特に目立つグループのまとめ役だ。「何?

?酒氏さん休みなのー?へー

ライバルが居なくて嬉しいのだらつ。『機嫌で彼女は今日も、わたくし達に話しかけてくる。

「どうせ寝不足とかの理由でサボりでしょ?やだ、あんた達、西藤だけじゃなくつて酒氏までお盛んなわけ?

いいよね、小金持ちは。財布が重いんじゃないの？今頃ラブホのベットで札束数えてたりして

「だから西藤ちゃんもその兄貴もエンローなんかしてないって何度も言つたらわからんのよ！青島のヤロウと歩いてたのは人違いだつつの！何？昨日言つたことも忘れたの？あつたま軽いわね中身詰まつてんの？ベンキョーしなさいベンキョー」

あらかさまな中傷になつちやんがいきり立つた。機嫌がいつもより悪いからか、勢いも三割増しだ。いつもの光景に、わたしはお約束の溜息を吐いた。どうやら、現国担当の青島先生とわたしの噂が立つてゐるのだ。

きつかけは、青島先生のパスケースの中にわたしの写真が入つていた、という噂だつた。どうやらそれは真実らしい。好奇心でわざわざ確認した生徒がいたのだ。でもわたしには、それが“わたし自身”とは思えない。

次に、青島はわたしを羨妬している、と言い出した生徒がいた。そんなことはない。そう言つても火に油、鎮火など夢のまた夢だ。

しかしながら、青島はわたしを羨妬している、と言つた。それもあながち間違いでもないらしい。

「こないだのテストでさ、西藤ちゃん消しゴム落としたじゃない？」
そんなこともあつたつけか。

首をかしげると、なつちやんは呆れたように「西藤ちゃん本当興味ないのね！」興味のないどうでもいい出来事はすぐに忘れてしまう性質なのだから、しかたない。

「ヤレ」だが、青島わざわざ拾つて、埃はらつて、西藤ちゃんに手渡したじやない。机に置きやいいものを、わざわざ西藤ちゃんの左手にポンッて

「…………それで？」

「で、――『氣をつかぬる』で、『氣をつかる』」

「…………」

で、とこう話だ。

「でも普通、ただの生徒にそこまでする？ 青島つて、対・西藤ちやんだと、さりげない仕草にそういうのが滲み出でてるよ。贔屓つて、いつのせ違つにしても、あれはそういう眼で見てるよ」

「…………」

女の感とこうぢやつだらうか。わたしあはじぢやら鈍いらしい。女子高だからして、この学校は女子比率が異常に高い。そんな女の群れには、一教師の一時の氣の迷い程度、お見通しなのだらう。

「ねえ西藤、それ、アンタの兄貴でしょ」

そもそもわたしは興味が無い。興味が無ければ、それはわたしに
とつて不必要なものだ。しかし、そもそも言つていられない事態が起
きた。それが三日前のあの日のことである。

「ちょっと聞いたんだけど、青島つてまだ中学の先生してた」「元」
生徒襲つて首になつたんだって」

「うつそまじで！」

火に油、ならぬ灯油、否、ガソリンだ。そこにさらに薪を投げ込
んだのが大野さんだつた。

「知つてるそれ」わたしは自分の耳を疑つた。

「ねえ西藤、それ、アンタの兄貴でしょ」

「アタシ、見たよ。昨日、青島と歩いてたでしょ？」・・・わたし
じじゃない。

「じゃあアンタの兄貴？双子なんでしょう？そつくりね～」

「男の売春は罪にならないって言つから、安心なんぢやないの？」

「ちょっと大野ツ！」声をあげたのはなつちゃんだつた。

「兄貴に似てるその顔で誘つたんでしょう。やーね」そう言つ、大野
さんの顔は憤怒に燃えるように真つ赤だつた。

奥歯を噛みしめ、そう大きくない声で呟くように言葉が飛び出す。
放課後の騒がしかつた教室は、いつしか静まり返つていた。
わたしはピンときた。どうやら、こんなわたしにも女の感という

ものは一端にあつたらしい。

大野さんはたぶん、恋をしている。それも青島先生に。

「いいかげんにしなさいよ・・・大野」静かに、ミヅキが席を立つた。

「最低よね。青島もさあ・・・まさか男相手とか、どんだけのことしたらそりなんのかしらね」

謂れのない中傷に興味はなかつた。想いなんて目の見えないフワフワしたものが原因なら、真相は本人しかわからない。もし、青島先生がわたしを好きだとしても、わたしにはその気はないのだから。告白でもして来ればまた違つただろうが、青島先生は何も言つてこないので。まだ、わたしは当事者と傍観者の間をうろうろしている。しかし、それに凜と、青島先生の過去という具体的なものが発生すればまた別だ。

もう興味云々の問題ではない。わたしは事実に、ぼつねんと立ち尽くすことしか出来ない。

ちょうどその瞬間、ミヅキの放つた音が響いた。

わたしは兄に会いに行つたあの日、人間を見る目を無くした。

魔法使いは確かにわたしと兄と引き合わせてくれた。しかし、その対価というようにわたし達兄妹は、人を人と認識できなくなつた。これは呪いだらう。あまりのことに、わたしは大好きだったスポーツもやめてしまった。チームプレーがで居ないわたしが、チーム

に居られるはずがなかつた。

だけれど、容姿が分からぬ分、より対人関係には内面の相性が現れた気がする。短気で男前なミヅキと、明るいなつちゃんは、そうして出来た親友だ。

凛はわたしのが唯一視覚的に『人間』に見える人で、たつた一人の大切な兄だ。魔法使いのことは憎んでいるといつてもいい。しかし自業自得といえばそれまでなのだ。

凛に会いたいと願つたのはわたし自信。兄に会いたかった。この気持ちを共有できる、同じ立場の誰かが欲しかつた。見たことも会つたこともない兄だから、愛していたかと言わると、何も言えない。

ただ双子という繋がりには、他には無い何かがあるんぢやないかと思った。

わたしは興味のないものはどうでもいい、という性質である。わたしはまだ見ぬ兄に、多大な興味があつた。

今ならそれ以上のものも有ると、胸を張れるだろつ。

兄の特異体質も、それによつて、かつてそういうことがあつたことも知つてはいた。それが青島先生相手だつたというのは初耳だつたけれど。

どんな偶然なのだろつ。兄を辱めた人が、わたしの近くに居た。そしてその兄は、その男と歩いていたという。ついでにその男は、わたしに好意を抱いているらしい。

なんだそれは。偶然なんてもんぢやない。そもそも兄は、県を隔てた遠く向こうに居たはずだ。それがなんで、この街に居る。そしてなんでわたしはそれを知らない。連絡なんて簡単に取れるのだ。

凛に、わたしに隠さなければならない何かがある。それをしてい
る。そうとしか思えなかつた。

じゃあそれは何だ?と、考えたときに、浮かんだ人物。
たぶんきっと、パスケースに入っていた写真は、わたしによく似
ている誰か。

青島先生。

「家庭の事情、だつてさ」

(知つてゐるわよそんなことひつー。)

まことは手のひらが痛むのも構わず、壁をバシンと叩いた。裏庭に面した渡り廊下。プールに続くそこは、今の季節、木の葉を被つているばかりで誰もきやしない。部活動が活発なため、この学校はきちんと体育館と小さなプールがあるので。

(知つてゐるわよー。)

(なんでこつも上手くいかないの)
(なんで私は
つかり!)

そもそももの間違いは、あんな男に惚れたからかもしれない。ビニがいいかなど、自分でもわからないのだから。

前に聞いたことがある。「先生、好みのタイプって、どんなですか？」

まさか自分が、そんな会話を振られるとは思わなかつたのだひつ。驚いた顔が可愛かつた。

私の髪が長かつたからか、はたまた誰かを連想したのか。先生は小さく、

「ショートカットかな」と言つた。

(知つてたわよ・・・・・)

軽い気持ちだつた。少しでも知りたくて、手を出した。それだけだつた。「教えてあげるよ」、と言われたから。

どこの誰かなんてわからない。もしかしたら、人間ですら無いかもしない。そんな彼はこうなることをわかつていたのだろうか？

ちょっとした、おまじない程度の気持ちだつたのに。それがまさか、こんなことになるなんて。

今日も、先生を見ていない。(くそつ・・・・)

追いこんでいるのは自分。そんな私を見て、あの人はどう思つか。
誰が言ったのか。愛は思いやり、恋は下心。

上手くいかなくなると、どうして自分の体は勝手に動いてしまう。
殴った手が痛い。殴られた頬が、心臓が痛い。
(なんで私じゃないのよー)

魔法使いは意地悪だ。

「よかつたね。今日、青島も休みだつてさ」
なつちゃんの言葉で、ハツと我に返つた。
「・・・・・青島先生が？」
「家庭の事情、だつてさ」
「・・・・・」

ミヅキの欠席理由は風邪だという。熱が39 あると本人じきじ
きにメールが来た。そんなことをしているなら寝ていいと、わたし
達は揃つて返事を返したが、どうやら暇で暇でどうしようもないら
しい。メールなのをいいこと、ちょくちょく話題を振つてくる。
さすが、女の喧嘩にグーで殴つたミヅキ嬢。高熱のくせに意外と元
気だ。

「帰りも病院寄るつしょ？」
「そうだねミヅキが風邪だから

ミヅキはあれから、毎日放課後に山崎さんに会つて行つていた。
今日はミヅキの代わりに、わたし達で山崎さんは我慢してもら
おづ。

しかし、青島先生が欠席というのは気になる。わたしは偶然とい
うものに敏感になつっていた。

(凛・・・・・)

凛が黙っているなり、終わるまで待とう。今すべきは見守ること
静観することだ。

(早く・・・・早く・・・・) 早く終われ。

魔法使いはまた魔法を使いました。

今度はやさしい女の子。

友達のために腕を振ります。

はてさて、立派な魔法使いになるでしょうか？

どきどき

じきじき

じきじき・・・
- - -。

「・・・・・寝めりやれり」としてねえよ・・・・・

携帯が鳴ったのは、画面の左端の時計の長針が、ちょうど十一時を指した時だつた。

マナーモードにしたつもりでそのままだつたらしい。熱に茹だる頭を振つて、酒氏ミヅキはキーを押す。（いま、病院で、すつ、と）
「・・・・・ふー・・・・・」

毎日病院なんでもに通つていたからか。昨日の夕方から出た熱に辟易しながら、ミヅキは羽織つてきた厚めの上着に身を沈めた。

（山崎さんに会つて行こうかな）

診察は終わり、あとは帰るのみだが、どうじょうか。どうせ施設は同じだ。すでに伝染する時期は過ぎてゐると言われたし、顔だけでも見に行こうか。

思い立つたら吉日、とばかりにミヅキは立ちあがつた。ここ数日で慣れた廊下を行く。歩いているととたんに上着が暑くなつたが、荷物が増えると余計だと我慢した。

ミヅキは殿堂入りの短氣である。思わず級友の心無い言葉に激怒し、とつさにパーでももちろんチヨキでもなく、乾いた粘土の塊のような、グーの拳で殴るくらいの短氣である。少女の柔肌にメリこんだ小さな拳は見事にテクニカルヒットを飛ばし、机の群れにボクサーも真つ青にふつ飛ばした。火事場の馬鹿力だ。そこからまさかの掴みあいに発展したのは、当然の結果である。

しかし彼女には、その短所を補う行動力がある。

この時間だと、梓の母はまだ仕事だろう。もしかしたら、父親のほうと初対面、となるかもしれない。ノックをしたが、返事は返つてこなかつた。

白い扉は軽く引くだけでスーッと道をあける。すぐに田に入ってきたのは、カーキ色をした男の上着の胸元だった。

「うわっ、すいません！」

飛びのいたのは相手のほうだ。扉を開けようとした格好で固まつていた青年は、慌てて道をあける。（・・・誰だろう）

見たことない顔だつた。温かみのあるクリーム色の壁の中、青年の真っ赤に染めた髪が映える。高校生だろう。なかなか整つた顔立ちをしていた。

扉の前を動かず、自分を見てくる女に困惑したように青年は身動きをする。

「えっと・・・・オレもう、帰るんで」

「ちょっと待つて、どちらさま？」

ここは曲がりなりにも、嫁入り前の淑女が意識不明で横たわる部屋である。病院職員が、そう簡単に性別を入れるとも思えない。不躾な質問だったが、青年は簡潔に答えた。

「事故の時、その場に居たんだけど、どうなつたか気になつたから見舞いに」

青年は困つたように頭を搔いて、病室の椅子におさなりに置かれた、見舞い用の小さな花束を指した。

「・・・・山崎さんを病院に運んだ人？」

「その場に居て近くで見かけただけです。救急車呼んだのは他の人」いかにも不良な外見に反し、思つていたよりもずっと堅実な敬語で彼は話す。

「目の前落ちていったんで、気になつて。オレあの時犯人捕まるのに必死で、なんも出来なかつたから・・・・」

そこで初めて敬語が崩れた。目の前の女が、自分と同世代か、年下程度だと気付いたのだろう。そこでミヅキも思い出しす。（確か・

・・・

「アンタ、事故の時の・・・」

(なんてこつた)失態である。友人の恩人と会付くと、ミジキは迷いなく熱でふらつく頭を下げる。

「なつ・・・・！」

青年は絶句して顔まで赤くし、うろたえる。

「別にオレ・・・・なんも・・・」

「アンタのおかげだよ。君が止めてくれなかつたら、山崎さん居たまれなかつた」

「・・・・・」

「ありがとう」

「・・・・褒められる」とはしてねえよ・・・・・

不満そうな彼に、ミジキは一転。眉を寄せた。

「・・・・せつかくの人の気持ちをいらないつてどうこうことよ。謙遜なんていらないわ。出ちやつた感謝の言葉なんだからさ、男らしく潔く受け取りなさいよ」

感謝を受ける道理はあっても突き返すとはどうこうことだ。持ち前の短気が発揮されたストレートな言葉に、せりに青年はぶすくれた顔を晒す。

「はつきりしない男ねえ！もうありがとうって言つてるんだからそれでいいじゃない。アタシのありがとうは、山崎さんの代理のありがとう、なんだから」

「・・・・・・・・・」

彼は何か言おうとして、口を閉じた。

「それでいいのよ。黙つて受けときなさい」

「なんで偉そうなんだよ・・・・・」

「アンタがあんまりにも情けない顔してるからよ」

青年はミジキから眼をそらし、入り口脇の鏡を見た。そこにはbettと、点滴につながれた梓が見える。それを見ながら、彼は脱力したような深いため息を吐いた。

(・・・・言いきつた) ミヅキを妙な達成感と疲労感が襲う。(そ
うだ・・・・アタシ熱あるんだつた・・・・・)

今の今まで忘れていた事実を、吐く熱い息とともにやりす「」した。
(・・・・アタシも帰ろつかな)

そんな時だつた。

カシャン

何かがぶつかる音がして二人は同時にそちらを見る。

「・・・・なんの音・・・」

見れば、点滴がベットの淵にもたれかかり、斜めに傾いでいた。たゆんだ管が、ベットに届くことなく揺れている。

「あつ」足が動いていた。

気付けば白いシーツにくるまれたそこに手をつき、一人揃つてその光景を網膜に焼き付けていた。

幻じやない。

「山崎さん・・・・・！」

「おい、大丈夫か」

彼女はそろそろとこちらを見た。

「・・・・・酒氏さん？」

「そうだよ・・・・つ」

魔法使いが魔法をかけた。

「…………なんだって言うんだ……」

「…………なんだって言うんだ……」

昼休み。藍はこそしと金屬の塊をポケシトに忍ばせ、トイレの個室に籠城していた。誰も居ないのを確認してそつと、画面を開く。学校で携帯電話を使うのは初めてのことだ。

『めずらしいね。いつも家に置いてるのに』

「朝あんなことがありましたから・・・・・ああやつぱり

【メール一件】の表示。

校則で、学業に無関係な物の持ち込みは禁止されている。中には隠れて持つてきている生徒も居たが、藍は例の『ことく、それを破つたことは無かつた。しかし今日は今朝のこともあり、迷つた挙句に電源を切つて忍ばせていたのだ。

「ここの数日、トラブルが多い。この生靈女子高生の事故を皮切りに、今朝の血痕だ。そこで冒頭の、『なんだって言うんだ』の台詞に繋がる。

少し前までは、大きな出来事と言えば自分の進学か姉の一人暮らしどびュー程度。それくらだったといつのことだ。

何かと氣苦労の多い少年は、メール画面を開いて眼を丸くした。隣りから覗き込んでくる生靈が邪魔で仕方がないが、それどころではない。

『ちよつ・・・・・ねえ！なんで酒氏さんのメアドゲッチュしてんのさー私とこうものがりながらこの浮氣者つ』

「ちょっと黙つてください」

『なにさ女子高生キャラはボク一人で十分じゃあないか。被るんだよー』

「山崎さん、つるやー」

『つるやーって漢字で五月の蠅つて書くんだよ！？虫かいボクは！いや無視かこの状況は！』

「・・・・・」

『うまいこと言つたのに誰もつっこんでくれない！なんだいカチカチカチカチ画面ばかり見てえーそんなに見ても三次元も二次元もひっくり返らないつつーのつ』

メール画面なので、その先にあるのはれつきとした三次元である。

「ちよつと山崎さんこれ見てください『また無視か！』

【12:22

(酒氏 ミヅキ)

件名(山崎さんが)

山崎さんが意識を取り戻しました。

坂城くんも知りたいかと思つて。

本当はもう少し前にわかつてたんだ
けど、諸事情で今の今まで報告出
来ませんでした、ごめんなさい。

「返信してみます」

藍は再び操作を始めるが、梓の右手がそれを制す。「山崎さん？」

『いいよ、後で』

「何言つてるんですか。良くないですよ

『いいの。何かの手違いだ。ボクはここにいるんだから！』

そう言つて梓は腰に手を当て。仁王立ちで自分の存在を主張して見せた。

「だから確認しないと」

『向こうも迷惑だよ。今は平田の昼間なんだ』

藍は矛盾を感じ取つた。ふつふつと、怒りの感情に似た腹立たしさが湧いてくる。

「山崎さんが良くて、僕が良くないんです」

睨みつけるように、梓を見上げる。

自分の顔を見てみると、と言わんばかりに、ぐつと真っ黒い画面になってしまった携帯を突き付けた。昼間のトイレといつもの意外に明るい。暗い画面は、立派に鏡の役割を果たした。

ややあって、梓の手と、体までが一步離れる。

「僕も無視したりしませんから。必要ならちやんと話だつて聴きます。最後まで付き合いますから、お願いします」

『・・・・・うん』

梓は小さく頷いた。

藍は放課になると早足で帰宅し、鞄もそのままで鍵だけとつて、すぐに自転車にまたがった。

住宅街を抜け、大通りを横切つて、例の歩道橋の下を走る。

梓は昨日と同じよつ、相変わらず妙なバランスで後輪にまたがつていた。

『どこ行くの！？』

「女子高です！」

「ワッ」

言つた途端背後を急なGが襲い、慌てて藍はブレーキを引いた。

「ちょっと、山崎さん・・・・・」

藍の背中の制服の布を握りしめたまま、梓は噛みつく。『病院じゃないの！？』

喚く梓に、少しばかりのいたずら心が湧いたのは、仕方のないことだろう。

「 あのですね、山崎さん」藍は意外に負けず嫌いだった。

「誰が、いつ、病院に行くと言いましたか？」

藍が小さく笑う。魂が虚脱したように固まる梓に、笑みが深くなつた。

『 ・ ・ ・ ・ ああもうつ、進行方向前方！全速力つ！』

「・・・・・山崎さんが、眼を覚ましたといつので。

『あー・ストップ！ストップ！止まれアイ！』

「ギャツ制服が伸びる！』

Y女子高まであと200mといったところで、梓が藍の裾を引いた。『いやあそこ！西藤さんがいた！』

「西藤さん！』

大中小の中の少女が、前方から歩いてくるところだった。彼女は一瞬、驚いたように立ち止り、すぐにこちらに駆け出す。

「どうしたの？』

「・・・・・山崎さんが、眼を覚ましたといつので。何か知ってるかと』

「・・・・・』

西藤はグッと、眉を寄せた。一瞬のことだったが、困惑と怒りが混じったその表情に藍は驚く。

すぐにもとの無表情に戻った彼女は、じっと藍を見た。

「あの・・・・・？』

『・・・・・』

梓はその姿に既視感を覚えた。そういうえば、彼女をいつやって見るのは初めてかもしれない。彼女は梓にとつて、クラスメイトの三人グループの一人に過ぎず、いつも三人の中では一歩引いて立つていた彼女は、外見よりも、むしろその大人しさの方が印象深かった。よく見ると彼女も整った顔をしている。美系と言つていいだろう。あと数年して化粧を覚えると化けるタイプだ。

瓜実顔の色白で、切れ長の目。全体的に細く、腰の位置が高いの

で、制服でなければ少年にも見えるだろ。」

異国風にも見える外見。黒髪と黒目が、あまり似合っていない。

似合つとしたら……。

『西藤ちゃんって、下の名前はなんだっだけ』

(・・・・え?)

藍が困惑した田で一いちらを見て来る。

『聞いて。下の名前』

「…………あの、西藤さんって、下の名前はなんて書つてますか?」

先程のあの表情。髪をもう少し短くしたら

訝しげにしながらも、爛は答えた。

「…………西藤ラン。爛々と輝くとか、絢爛豪華の爛」

梓はその顔を知っていた。

『双子のお兄さんの名前は?』

藍は復唱する。「ふつ、双子のお兄さんの名前は?」

「凛と立つの凛で…………ねえ、何で知ってるの?」

爛は今度こそ、はつきりとあの顔を見せた。黒々とした眼が、さらには深い色になる。

「凛のこと、君が何で知ってるの?」西藤爛が迫る。

「やつ、山崎さんに!」

情けなく声が裏返った。

「嘘だ」

嘘ではなかつたのだけれど、爛はきっぱりと言いついた。

「君は嘘をついてる。君は兄のことも、わたし達にあつたことも何も知らないだろ。誰が君にそれを言わせたの?」

(・・・・そうだ、この田だ。この色)梓は唾を呑んだ。

「何で君は凛のことを聞く?何を知ってるの?凛がここに来てる理由も知ってる?」

比喩ではなく、眼の色が変わった。藍にはそうとしか見えなかつ

た。

質問を繰り返す彼女は気付いているのだろうか。青白い瞳は、なぜだか彼女を神秘的に見せる。

息をのみ、藍は一步、後ろへ下がった。ハンドルから手が抜け、ガシャンと大きな音を立てて自転車が倒れる。下校途中の生徒たちの視線が向けられた。

殺氣迫つて爛が藍の肩に手を伸ばした。「ねえ、どういづ

」語尾が融ける。

「え？」

爛は瞳を手の平で覆つて立ち尽くす。一秒、一秒 時間がゆっくりと過ぎた。

そして叫んだ。

「嫌だつ・・・凜！」

彼女は鞄を掴んで走りだした。

「・・・え？」

その場に置いて行かれた藍は、ポカンとその後ろ姿を見送った。

『藍ほらー。』梓が叱咤する。『追いかけるよー。』

『・・・・・西藤さん足速いな』

梓が感嘆の息を漏らした。藍は必死でペダルを踏むものの、影すら掴めない彼女に汗が流れる。

『陸上部か何かなんですかあの人！？』

『いや、確かに、中学まで男子に混じって野球部に

「ええ！？」

『あ！いた！』

「凛どうしたのその怪我！」

「・・・爛」

平日の駅前は、主婦の姿が目立っていた。学生の放課後活動するには、まだ少しだけ早い。奇しくも、細く短いビルの群れの隙間から、あの歩道橋がすぐ側に見えた。

通行人の好奇の眼もはばからず、爛は声を荒げた。

「わたしももう、知ってるんだから！」

凛は、妹がこんなに取り乱したこところを始めてみた。原因是自分だ。分かり切っているが、それでもやはり、妙な気分だった。

まだ一人の双子歴はたつた二年である。片割れと言えど、二人はお互いがどんな場所で、どんなふうな経緯を経て育ったのかよくは知らない。

凛が知っているのは、父に引き取られた爛は、中学一年まで野球部に居て、現在父違いの妹は小学生、夫婦仲は順調。円満家庭のことだつた。

対して凛は、母子家庭と義理父の居る生活を（正確には、父親に“なりそうだつた”人物が居る生活を）一度ほど繰り返して現在に至る。

血を省けば、二人の共通点は多いくらいで少ない。性格も、似てはいるが爛の方が真面目だし、凛はどちらかといえば無気力で大雑把だ。友人関係も、爛は狭く深く、凛は狭く浅く。

爛は人間好き。凛は人間嫌い。

爛は困つた人が目の前に居ると自然に助けるだろうが、凛の場合、まず目の前でそういうことが起こること自体が、うつとうじいと思つてしまつ。

頭に巻いた包帯を、隠すよろに被つた帽子を剥ぎ取られ、凛はぼ

うつと声を荒げる爛を見ていた。

「ねえ凛、どうして教えてくれなかつたの？」

「・・・・・『言つか』『言わないか』だつたら、言わなの方がいいと思つたから」「

「なんでそれを凛が決めるの？」

しかし凛は、彼女がこう突かれると弱いことを知つてゐる。

「俺が爛の兄貴で、爛が妹だから」

「・・・・じやあ、わたしが姉だつたら、どうだつたの」

「ちょっと早く生まれただけじゃ変わんないよ。俺は姉でも妹でもこうした」

「同じ男だつたら！」

「それでも爛は爛になるよ」

凛にはわかっていた。簡単な問題だ。自分はどうなつてもこうしただろ。片割れのことは分からぬこともまだ多いが、それ以前に自分自身のことはよく分かるのだ。どうやつても、二人は兄妹だった。

「兄妹が兄妹を想うのに理由が居る？」

「わたしだつて同じつてことを忘れないで！」

人の感情は難解なようで、意外に単純だと爛は思つてゐる。嫌なことは嫌で、好ましいものは好ましい。

難しくしているのは人間自身だ。わざわざ人は、理由を見つけようとする。

そんなに理由が欲しいのか？爛は想う。

「わたしだつて同じだよ！凛が大事なのも、凛と一緒にいるためならなんだつて出来るのも！」

自分の答えはそれだけだ。

こんな簡単な答えを、どうして自分たちは見失うのだ。

自分によく似たその顔は、今は情けなく眉を下げている。

「どうして忘れるの？わたし達が違う人間だとしても、そこだけは同じでしょ？」

「…………でも、やらなきゃ。変わらないんだ。何もしなかったからほら、またこういう結果になつてる」

俺は変わりたいよ。凜は言つた。彼は爛の視線から逃げた。

「一人でやるうよ」

「それは俺が嫌だ！」

自分がやろうとしていること。人を一人、この世から抹消する行為だ。一緒に？ それは嫌だ。

「絶対に嫌だ。俺が出来ることを、爛がやる必要はない」

「わたしだつて嫌だ！ 凜が傷つくだけじゃないか！」

「だからといって、一人でやってどうする？ どうなる？ 被害も一倍だ、良いことなんてない。それに俺は力がある。わかつてんだろう？ お前と俺の力は違う。効果も、使い時も。セイレーンの使い時は、たつた今この状況だ。こういう使い方しか出来ない

「他のやり方を探せばいいだろ！」

「それじゃ駄目だ！」

凜は拳を自分の足に叩きつけた。

「この力っていうのはこいついう使い方しか出来ないんだ。俺は今、この力はもしかしたら、この時のためにあつたんじゃないかつて思つてゐる。今回のこと我が全部うまくいけば、俺は楽になれるんだ。いいか？ 爛。俺だつて、一年前何も思わなかつたわけじゃない。何度も泣いたし、ずっと寂しかつた。お母さんは飯を作つて食べさせてはくれるけど、それだけだ。一緒に食事したことはもう何年も無いし、休日はあの人は自分のためだけに時間を使つてゐるから、出かけたこともまったく無い。そこに一年前のアレだ。

そんなときに爛が来てくれて、俺がどれだけ救われたかわかる？ お前にそんなことさせるくらいなら、その前に俺はあいつを殺して自分も死ぬだろうな。お前がやつたら意味が無いんだよ。俺が一人でやらなきゃ意味が無い。

当事者は俺とあいつなんだ。お前は俺の妹だつたから、その端っこに巻き込まれた。それだけなんだ」

凛はこのように自分のことを吐露する人間ではない。

自分達は、どこまでも真逆なのである。外へ外へと排出するように、感情を制してきた爛に対し、凛はどこまでも内に内にと溜め込み貯蓄し、それを食って生きてくる。向かい合いつゝ、背中あわせにしているように、あるいは肩を並べたように、鏡のようとは言わないが、紙一重に自分達は寄り添っていたのだ。

自分達の共通点は、多いようで少なかつた。この十五年、彼と言う人間は、何を思つて生を廻してきたのだろう。

『寂しかつた』

ああ、それが全てなんだろう。

負けた。爛はそう思つた。

（・・・・そんな風に言われたら、何もいえないじゃないか・・・）

自分は負けたのだ。凛の想いに。自分の想いは、彼より弱かつた。彼の想いは強かつた。負けて泣いたことは、たくさんある。いや、あつた。久しぶりだ、この感覚は。

火山の噴火の様に、腹の底から湧いてくるものがある。くやしい。くやしくやしい！

耐えるしかないのか。噴火がいつか止まるまで、自分はこの熱さにじつと耐えるしかない。

悔しいの字は、後悔の悔だ。後で悔やむと書く。なら、自分は今、後悔しているだろうか？

爛は雑踏に消える後ろ姿を、黙つて見送つた。

本当に後悔するのは、あの姿が変わり果てて帰つて来る時だ。まだ後悔には早いのだ。

（なら、わたしは　　）

「・・・・・西藤さん」

すいません、なんて、罰の悪そうな顔で、坂城藍がそつと爛に声を掛けた。

（　　後悔しないほうを選ぼう）

爛は藍に向き直り、懇願する。

「君のこと、教えて」

「一年前、わたしは凛に会いに行つた」

年賀状の住所を片手に『小嶋凛』の名前を探し、彼の届く街に来た。彼の通っている中学校を見つけて、門のところに兄を待ち伏せた。家に行くほど、わたしに勇気はなかつた。母には会いたくなかったのだ。会いたいのは凛だけだつた。

でも、凛はいくら待つても現れない。当然だ。その時彼は、青島先生とのことで学校に来ていなかつた。だからわたしは、一度家に帰ろうとした。

魔法使いに会つたのはその帰り道だ。？それ“はわたしに夢を見せた。

「夢？」

「ああ、そう。気付いたら夢を見てた」

必ずしも、寝ている時だけ見るものではない。最初のそれは、まさに白亜夢そのものだつた。わたしは確かに、その時魔法使いと会話したはずである。よくは覚えていない。

夢の世界については、わたし達だけのものだから何とも言えない。わたしはその夢で凛に会つた。それが魔法使いの魔法だつた。それから、凛にはいつでも夢で会えるようになった。

実際に電話とかでもこつそりと連絡をとるよりもなつたけど、でも夢で逢えば姿も表情もわかるから、そつちのほうがずっと多かつた。

凛はあのことがあつて、あまり家から出られなかつたし、距離の問題もあつた。夢で会うのは、たつた一つといつてもいい手段だつた。

た。

凛はもう自分の力のことは認識していく、『セイレーン』と名付けた。海で船人を誘い、溺れさせる西洋の妖怪の名前。

人魚とも言われるそれになぞらえて、彼はその夢で逢うことを『人魚姫が足を手に入れた』と言つた。

「凛は、童話オタクなんだ」

「童話オタク？」

「ほら、白雪姫の第一版は継母じゃなくて実の母だったとか、ヘンゼルとグレーテルは子捨ての話だとか、そういう裏側の話が好きなんだ」

人魚姫は一つの悲劇の形である。人魚というものは、昔から報われることは無いのだ。八百比丘尼では娘が洞窟の奥に消え、ろうそく屋の人魚は売られていった。

「山崎さんと気が合いそうですね」

『いや、むしろ同族嫌悪だったよ』

「・・・・・」

呪いに気付いたのは、まずわたしだった。気が付いたらそうなつていた、としか言いようがない。

人が人に見えない。全ての人間は、動き回つて言葉を話す、別に違う何かだった。気がつけばそうなつていて、わたしは気が狂いそうになつた。大好きだった部活を初めてサボつて、学校から逃げるようになつた。大好きだった途端、電話が鳴つた。
偶然だつたのか、何かを感じたのか。初めて繋がりをはつきりと感じて、ずいぶんと安心した。

それからは対人関係が、ぐるつと一回転した気分だつた。

表情が見えないから苦手だつた電話が、好ましいと感じるようになり、逆に顔を合わせて何かを話すのが苦手になつた。部活も、『受験のため』と言い訳してやめた。

支えは凛だった。彼は渋るわたしを進学させるために説得して、わたしがせめての対処として、一番近所の女子高を受験した。

「そこでなつちゃんミニギキに出会って……」「ちょっとまつてください。魔法使いは、どうなつたんですか？」
「いつのまにか消えてた。魔法使いは、わたしにもよくわからないんだ」

凛とは違うけれど、わたしにも力の様な物はあった。凛と違い、わたしはその力を大分小さなころから自覚していて、たまに使う程度だった。

小さな予知能力のようなものだ。少し先だったり、数年単位先だったら、いつ起こることか分からぬから、見えても大したことは出来ない。ただ、良い結果が見えれば、それを目指して頑張る、程度のものだった。

見えるのは、何かに集中しているとき。気持ちが昂ぶっているとき。眠つている時に夢として見ることも多い。ただ、その場合夢なのか予知なのか、その時にならないとわからないから、あまり活用は出来ない。

見えるのはだいたい数秒から、長くても一分から一分。
「わたしがさつき見えたのは、凛が全てをわたしに告白する瞬間だった」

未来のわたしは戦慄する。そして何も知らずにいた自分を責め、兄を責めた。
それだけの映像だつたけれど、十分だった。凛がやること、そしてその結果。

「わたしは・・・兄が、傷つくのは見たくない」
足を進めながら、爛は自分の手を睨みつけた。

「元凶は、やっぱり魔法使いですか」

「魔法使いがどんなものかは、わたしにはわからない。凛もそうだ
つたはずだけど、もしかしたら凛は、何かに気付いたのかもしれない
」

まじない

『君のこと、教えて』その言葉に藍は頷いた。山崎梓の身に起つたこと、彼女が今、ここに居ること、藍自信が、あの場所に居たことなどを話した。彼女は過去から、今現在の状況を順を追つて話した。

部活のランニング中らしい学生の群れとすれ違つた。梓の体がある病院までの道なりに肩を並べながら、藍はポツリ疑問を零す。

「・・・・なんで知つてたんだろう」

「え？」

『何が？』

向けられた女子高生一人の視線に、藍は頬を引きつらせる。藍は迷いつつも口にした。

「・・・・西藤さんとお兄さんことを知つていたクラスメイトです。あと、山崎さんの病院に居た西藤さんのお兄さんも、何でそこに居たんだろう」「……」

「・・・・大野さんは、『一緒に歩いていたのを見た』って言つてたけど」

「でもそれだけじゃ。その青島先生が、一年前にしたことも何でいまさら噂になるのか」

タイミングが良すぎるのではないか？

『誰かが触れまわってるんじゃないの？』

『誰かが噂を広めてる？』

噂なんて、人が関わらなければただの言葉の羅列だ。人から人へ、伝言ゲームをしなければならない。それなら、そのゲームの出題者は誰だろ？ そいつは一年前のことを、確実に知つているに違いないのだ。

爛は顔をしかめて、口をへの字に曲げた。

「・・・・まだあるよ。凛が何で、山崎さんを落としたのか」

心なしか、口調が刺々しい。彼女は“梓”が居るだらう場所を睨みつけた。

「凜は一年前のこととで動いてる。なら、その噂を広めた人物が自分たちに害あると思ったから、あの歩道橋から落としたんじゃないの？」

『・・・私がその伝言ゲームの出題者だつて？』

「そんなこと――！」

爛は藍の隣の空間を睨む。その反対側、爛の肩越しに、梓は半眼で立っていた。

『そりや無いね。酒氏さんも言つてただろ？私は学校にも、そこで起ころる教師の痴話げんかにも興味はない。もちろん君にも、君のお兄さんについたことにもね』

「そうですよ、酒氏さんも言つてました。山崎さんは学校に興味がない人だつて。そんな人がわざわざ噂を流しますか？」

『私は決して自分の性格がいいとは言わないよ。けどね、私は少なぐとも、そういう部分は学校なんかじゃ出さないつて決めてんだ。地味な優等生の猫被つて、そこそこ生活して。青島の噂なんぞ、知らなかつたよ。私はアンタの兄貴と同族だ、アンタら兄妹も青島も大野も、私にとつては興味の範囲外なんだよ』

「・・・・・山崎さん、怒つてます？」

『ああ腹立たしいね！このボクが！そんなみみつちい真似する人間だと判断されたのが嫌だ。やるならとことんやるよ…』

「・・・・・喧嘩なら正々堂々買うぞ、と言つてます。やっぱり違いますよ。山崎さんじゃない。そもそも、この人にそんなことする理由が無いぢやないですか」

「・・・・・ごめん」

爛のしかめつ面が、拗ねたようなものに変わつたよつて思えた。しかしことに、もとの無表情に戻る。また何かを考えていよいよだつた。

止まつていた足をまた進める。

『・・・・ねえアイ』向こう側、黙りこんでしまった人一人を隔てた向こう側で、梓が呼んだ。

『あ、そのまま黙つて聞いてね、じゃないと前言つたひとり言の激しい変な人、みたいな感じになっちゃうから』

「はあ・・・・」

ため息なのか、相槌なのか。よくわからない音を漏らしてアイは肯定した。

「はあ！？」

「なに？」

「あ・・・・いえ」

とてつもなく重い話をされそつた切り出しだ。青くなればいいのか、赤くなればいいのか。

むしろ白い顔で藍は大人しく続きを待つた。

『カミングアウトをしようと思う。怒らないでね？ 不可抗力だから。あのねえ、前に、君に言つてないことがある、って言つたよね』

そんな重要な話を、なぜこのタイミングで、せめてこちら側で話さないのだろう。理由は明確かつ簡単だった。彼女自身が、彼と顔を突き合わせてそれを言えるほど、腹が決められないからだ。

『あのね・・・えつと、たまにボクって、君の心読むだろ。君はそれをボクが取り憑いてるから起くる現象だとおもつてるみたいだけどさ・・・・えーと、実は、』

嫌な予感がした。『実はね、君の中、ボクにはぜーんぶ筒抜けなんだよね！』今度は叫ばなかつた。

『だつて君の中、ボクでいっぱいなんだもん！ そういうのって恥ずかしいじやない？ 言つてるボクも恥ずかしいもんね！ あ、なら黙つて？ 駄目だよ黙らないからね。』

ていうか君、ボクのこと好きなの？ つてくらい悩んでくれてさあ、嫌いと好きは紙一重つてことを心から実感したよ。あの三日間だつて、なんだかんだ言いながらも、ちゃんと頭では考えてくれて

てさ』

今、藍は赤くなったり青くなったりと忙しい。とりあえず叫びだ
しはしなかった。『いつだつたか、あの事故のことでも、『山崎さ
んは怖くなかったのだろうか』って、考えてたでしょ
』

『ボクだって、そりや怖かつたさ。

でもね、あの状況で助けようとした人の声が聞こえて、実際助け
てもらつて、もうそれで安心しちゃつたのかもね。

今は不思議なことに、まったく怖くないんだ。この体になつて怖
かつたのは、ただの幽霊のまつてこと。見えない触れない話せな
い。もうそれは人間じゃないだろ？ そのほうが怖かつた。終わつた
ことはもう怖くない。

君に見つけてもらつて、本当に嬉しかつたんだ。たつた一人でも、
ボクが見えて触れて、話ができる。これがいかに貴重で幸せなこと
だろう！ そう思った』

いつのまにか、梓が田の前に居た。最初のあの時と同じ位置だ。
ひよこ色の頭を見下ろし、手の甲で藍を撫でる。名前と同じ藍色
の眼が零れそつだつた。なんでこの色を間違えたりしたんだろう。
『もつと自信持つてよ。控えめのはいいけどね、君は人を一人、
それもたつた三日間で、知らないうちに救つてたんだ。しかも相手
は初対面の年上の女。凄くないかい？ 知つてた？ 最初からボクは、
素のまんまだつたんだよ。親の前でもここ数年は、可愛い娘の皮を
被つてた。君の前じや、ただの？ 山崎梓『だつたんだ。これはそ
うできることじやない。

君は、普通のことをあつさり普通にしでかす、凄い奴なんだよ』
もう照れたりはしなかつた。

爛が隣にいるにも関わらず、そういうことを言える彼女が、やけ
にうらやましい。

(・・・・・なんで、今ここでそういうことを言つんだ・・・・・)

『いやあ、ぶつちやけ君の反応がおもしろいか 痛い痛い痛
い！ ほつペ抓らないでっ！ 照れ隠しはもつと穩便に！..』

魔法使いは子供が好きである。
魔法使いにとって、子供は夢のカタマリだった。子供と夢は『で
繫がる。

愛しかつた。愛していた。母性か父性か、はたまた恋か。だから
こそ子供たちの夢を叶えてきたし、出来るのはそれだけだった。存
在意義だったのだ。

しかし彼（と、しておく）は、疑問だった。

子供はいつまで子供だろう？

青少年が一度は考えるよう、魔法使いは首をかしげ、そして唇
を尖らせる。わからない。

人の多くは、この疑問を永遠の謎として、心に仕舞うこともある
だろう。もしくは自分なりの答えを導き出して、納得するやもしれ
ない。

しかし彼は違う。彼にとってこの疑問は、ある意味で存在意義を、
根本からくつがえす疑問だったのだ。

もし、もし、大人のつまらない願いを叶えてしまつていたら。
魔法使いは永遠の子供だった。ネバーランドの住人だったのだ。
彼を作った誰かは言った。

（大人に魔法を使つてはいけないよ。）

その誰かはもう忘れてしまつているだろうが、彼は確かにそれを
言われたのだ。

（大人は駄目。だつて消えてしまふから。）
きっと消えてしまうのは、魔法使い自身だ。自分が消えれば、次
の魔法使いが現れるだろう。

でも、？自分の誰か“が、そつやつて子供たちに触れていくのは、我慢がならない。

さて、目の前の子どもはまだ子供だろうか。

人魚姫は泡になつて消える。目の前で消えていく。彼は魔法使いであるからして、それを見ていた。

ヒレもエラも無くして、どうして海で溺れずにすむだろ？ 奪つたのは自分だけれど、とても滑稽。

どこぞの童話のさまにもあるだろ。一時の激情に駆られ、母はついに子を二人とも失くすのだ。彼はもとと、賢い子供ではなかつただろ？ 最初に出会ったときは、確かにそつ思つたのに。見誤つたか？

彼は子供の皮を被つた大人だった。境遇を受け入れ、状況を判断して、臨機応変に最適な行動と思考を。喚き嘆いても終わつたことはしかたない。妙に気持ち悪い食指の動かない子供。

そんな気持ち悪い子供だからこそ、化け物に捕まつた。ツギハギちぐはぐな化け物は、あの気持ち悪い子供が何よりご馳走だつたようだ。かわいそうに、あんなものを食べるから、腹を下して一年もこんなところで一人寂しく。

しかし今はどうだろ。化け物が化け物だったのは一年前の話。子供の大人は何故だか、ここ一年で子供に戻つたらしい。

無鉄砲で身を滅ぼす馬鹿な子供。やがて姿を取り戻した化け物に、鬻られ食われ溶かされ一つに。

化け物退治なんて物語の中だけのことだ。化け物はもう飼う時代。身の中に飼つて、鎖につなぐ時代だ。なのにあいつは、それをわざわざ鎖を解いて、包丁片手にごっこ遊び。

魔法使いは、重い腰を上げた。今彼なら、ボク（・・）も魔法をかけてやつてもいいかもしない。

魔法使いは人から人へ、子供から子供へ、渡り歩くものなのだ。

「魔法使いは、一つだけ願いを叶える」

今、彼女の眼には自分はどういう風に映っているのか。エレベーターの鏡に映つた彼女は、細い顎に白い顔で、黒目がちの眼を伏せている。まつ毛は長く、影が出来ているほど。

どう見たって人間なのに、彼女には自分たちは全く別に映つていいのだろう。

「願いを叶えたらどこかに行つてしまふんだ。わたしは、彼がどんな人間で、どんな姿をしていたのかも覚えてない。魔法使いは呪い以外何も残していかない。全部消していくんだよ」

軽い音を立ててエレベーターが着いた。辛抱が利かなくなつたのか、爛は走り出した。アイはそれを追いかける。

ボクは無いはずの心臓が早鐘を打つを感じていた。本当に“早鐘”とはよく言つたもので、腹の底に響く様は、大音量の和太鼓が目の前で突かれる除夜の鐘だ。一回一回がそんなものだから、息苦しくも感じる。

白い手がクリーム色のドアに手を掛けた。ここに、ボクが居る。

「いらっしゃい」

枕に背を預け、笑つている自分が居た。アイはボクを見、あちらを見る。散々うろうろ彷徨つた視線は、一步下がつて両方視界に入ることで固定された。

自分の顔を客観的に見るというのは、そうできる体験ではない。

『・・・確かに悪人面してるなあ』

思つてることを正直に言つと、アイからの視線が冷たくなつた（気がした）。

「ああ、そちらも、こんにちは」

『あらやつぱり礼儀正しい。さすがボクの体！』

「アンタ黙つてくれませんか」

爛がカツカツとベットに寄り、ぐつとボクの体の肩を掴んだ。指が“食い込んで痛いはずなのに、“ボク”はまだ笑つている。

「…………凜はどこ。魔法使い」

「…………一度ボクにかかった子供は、分かつたやつもんなのかな」

(『え?何アレ魔法使い?中に入つてんの?ボクの体に?』
「自分の体なのに分からいんですか?ちよつと本当に黙つてくださいよ。学習することを覚えてください」)

「教えて、凛はどこ?」

「ボクは彼らにたくさん仕事をしたね。た――――つくさん。そう睨むなよ、疑問は全部、ボクのせいにすればいいさ。きっとそれが答えだもの。ボクはどうせ、君達の疑問から生まれて、それを糧にここにあって、そして疑問を生んでいくんだ。夢を持てよ、青少年。子供は大人の希望の種なんだから」

噛み合わない会話である。自分を客観的に見ることは、実に珍しい体験だつた。自分はあんな声をしていて、自分の表情筋はああ動くのか。捉えようによつては、不気味な光景である。

(あれは山崎さんじやない)

アイからそう伝わつてきた。なるほど、中身が違えば表情も違うらしい。ゲームソフトと機器の様なものだらうか。普段のボクを見ているアイの眼には、得体のしれない違う何かが映つているらしい。「ボクにとつてもそれは同じさ。過去、君達兄妹にボクは魔法をかけてやつた。でもね、ボクはどうしても君のお兄さんが好きになれなかつたんだ。わかるかい? あんな得体のしれない子供、気持ち悪くて好きになれやしない。とんだゲテモノだよ。

だからボクはある時、魔法をかけるのを少し躊躇つたんだ。でも君たちの願いはとても似てたから つまりや、こういうことだよ。“理解者が欲しい”。ね? そういうことでしょ?

馬鹿な大人なんかじゃなくつて、限りなく自分に近い人。願いはおんなんじだつたから、ボクは魔法を半分に分けたんだ

『ボク、魔法使いは好きになれそうにないや

「・・・・僕もですよ」

何ていうんだろう。(・・・・めんどくさい人なんだな・・・)

そう、それだ。魔法使いといつやつは、なんともめんどくさい性格

をしていろ。すっぱりハッキリ、モノを言えど。ほら、彼女も困惑している。

「・・・・どういう意味？」

「わっかんないかな。つまりね、つまり、こいつこと。

エネルギー削減？ってやつ。ほんとうはね、魔法使いの魔法は一人一回、おひとりさまワンコースなんだ。でも君たちの場合、どうしてもボクは君のお兄さんに魔法を掛けたくなかつた。だから双子らしくはんぶんじ。

君はどうやら、魔法を掛けられたのは自分で、お兄さんはそのどばっちりを受けたって思つてたみたいだけど、実際かけたのはお兄さんの方さ。その願いはお兄さんのものだ。君の言う呪いつていう魔法も。

で、どどのつまり君達双子には、それぞれ半分だけ魔法をかけてもらえる権利があるんだ。お兄さんはもう、君を守るために使つちやつたけどね。

で、どうする？半分ならちょうど、人探し程度になつちやうんだよね。君はどうしたい？疑問を全部解答するのも有りだよ

「・・・・・」

「とりあえず、自分が正しいと思つ選択をしなよ？どうせ後悔するのは君だもの」

きやらきやらきやらきやら

引き攀つたように魔法使いは笑つた。

「ドイツにいた、とある三兄弟の母親は、屠殺（）この果てに、本当に弟を刺殺した長男に驚き、とつさの激情に息子をこじらしていまづ。はつ、と我に返り、周りを見れば、そこにあるのは包丁を持つ自分と転がるもの、少し向こうには産湯に溺れた末息子。さてこうお話だ」

グリム童話第一版。あまりの内容に削除された話。

「勝てば官軍。負ければ賊軍。結婚し、女の幸せといつものを余すことなく全うした母の末に待つていたのは、地獄絵巻の我が家様

子。母は子に命をもつて教えたのだ、『痛みは必ず返つてくれる』と。

母と末子は教育の果て犠牲になつたのさ」

大仰に腕を広げて、身振り手振りも（といつても、ボクの体の方には怪我があるのでメインは手振りだが）激しく魔法使いは熱弁した。

「確かにここにあるのは、そこの山崎梓さんの体に、君の兄が魔法使いと呼んだ存在だ。ボクには体が無いからね、少しお借りしてい るんだけど、ま、次が見つかればすぐにでも出ていくさ。

ボクにあるのは、魔法のみ。ボク自身が、どこぞの誰かさんが創つた存在だ。ボクにできるのは、こうして魔法をかけるだけなんだ。ボクは呪いなんて知らないし、かけたつもりもない。いつか君達にはそれが必要になる」

『めんどくさい人だね、何が言いたいのさ』

アイからさらに困惑した雰囲気が伝わってくる。なんだつて言うんだ。

「・・・」

彼には一つ仮説があつたのだ。

「ボクは、自分の意志なんて端から持つてない。ボクを求める人が居なければ、何もできないのさ。山崎梓さん、その体を望んだのは君自身だよ。君の体のこの状態を望んだのも、他の誰かでボクじゃない。ボクの意志なんて無いんだ。今のボクは君なんだよ」

魔法使いは言った。

「今の“魔法使い”は君さ」

『約束しよう』

『次に会つときは、君が魔法使いだつた場合と、君の体が目が覚めた時に、俺が会いに行く場合。約束しよう。君の体が目覚めたら、俺は必ず君に会いに行く。違つた場合の時は謝罪させてほしい』
『さて　俺は化け物を倒したら貴方にわかる方法で伝えましょ。化け物を倒すのは最優先事項なので、魔法使いは絶対にその後になります。もし、貴方が魔法使いなら、貴方はどうなるかわかりますか?』

眼を開けて一瞬、ここが何処だかわからなかつた。

(・・・・ああ、そうだった)

住めば都を表現した部屋だつた。あの男の小さな城である。馴染まない場所で明かした夜は、体を痛めつけるばかりでちつとも休めなかつた。細く、長く、息を吐き、凛は天井の木目を見つめる。

(・・・・あいつ、本当に馬鹿なんだなア)

高台の寺。あの場所を選んだのは、他でもないあの坂城とかいう少年が居たからである。あそこで押した腕は掴まれて、可笑しいことに仲良く一人で転げ落ちたのだ。

そして気が着けばこの部屋にいて。

脳震盪を起こして氣絶していた自分を、青島はご丁寧に自分の領域に運び、治療してくださつたらしい。(馬鹿だな)

かつての教え子とその教師。当然の行動である。しかし、傷害未遂とその被害者なら?おかしいだろ?。

彼ももう分かつたはずだ。自分がなんで、この街に来たか。何をしたかつたか。あの時一步でも踏み間違えていればどうなつていた

か。

俺は人を殺していたかもしれない。

いまさらながら実感する。怖い。怖い、が……。

(・・・・まだ俺はやれる)

「・・・・やつてやる」

実際に小さく呟いてみた。（大丈夫・・・・大丈夫・・・・だいじょうぶ・・・・）

意地になつてゐるのかもしない。しかしそれでもいい。勢いに身を任せなれば、どうしてこんなこと出来ようか。

小さな男一人消えて、何が変わるだろ？ 答えは簡単、一番に変わるのは自分達だ。人一人犠牲にしてでも、変えたいものがある。陸に上がった人魚姫。そしてその姉はどう思つたのだろ？ まだ彼女は十五だつたのだ。

弟妹は守るものである。これは無条件だ。少なくとも、自分にはそうである。（だが、）もしかしたら責任感と罪悪感からかもしない。（妹をこうしてしまったのは自分だ）。

身近な自分より小さな子供は、親を手本にするように、自分からも何かを吸收するだろ？ それが彼女にとつては結果的に害あるものだとしたら。

そんな感情から、彼女は魔法使いに願つたのかもしない。髪を捧げて、短剣を持つて、危険な水面に顔を出して妹を救いに行つた。だがしかし、ああなんてこと、自分があの時ああしていればあの子は。

救いは利かなかつた。所詮、水面に顔を出した程度、陸に居た彼女には届かなかつたのである。自分も声を捨て、陸に上がる足を一本骨から裂くほどでないと。

彼女はそうすべきだった。本当に妹を救いたいのなら、そうるべきだったのだ。

魔法使いは、今、分かつてゐるのだろうか。今やろうとしていることの、その結果。彼女がいかに性格が悪いかが窺える。どうせ高

見て馬鹿にしたように笑っているのだろう。

悠久の魔法使いはただ一人、全部知つていてそれを見ている。それだけの力があるのに、何もしない。

だから人は、彼に頭を下げてその力を乞うのだ。

邪魔なのは青島だつたが、真に憎いのは、そんな魔法使いだ。もう“次”を考えなければいけない。

『魔法使い（・・・・）を（・）殴り（・・）やつて（・・・）殺す（・・）か（・）否か（・）』

その時、音も無く目の前の扉が開いた。凛は思わず身を固くする。が、視線だけはぎらぎらと抜き身の刃のように艶めかしく光っていた。

『君が魔法使いだった時』

「凛がどこに居るのか教えて！」

爛は叩き付けるように言った。魔法使いは無邪気にニッとした笑い、「オッケー」指でマルまで作って見せる。

藍はその表情に女々しく眉を下げた。『今の魔法使いは君だ』その言葉に間違いは無いのだろう。

だって今した顔は、まさしく“山崎梓”だった。

(・・・・ああ)

仮説は当たつていた。そして彼の言つ通りのなら、彼はきっとそうして何度も何度も繰り返し見てきたのだろう。今回の様なことも、またあつたのかも知れない。

藍の仮説は、梓がこうなつたのは“魔法使い”によるものではないのか？というものがだつた。魔法使いの存在が出たときから考えていたことだ。

彼の言つ通りなら、彼はきっと病氣の様なものなのだろう。それもはしかの様なウイルスだ。一度罹れば、もうかからない。そして、そのウイルスに意志なんて存在しない。

何故だかはわからない。藍はそもそも、自分が一番分からぬ人間なのだ。梓のように、自分をこうして客観的に見られれば、また違つたのだろうけれど。

何故だろう、同じことを言つて居る気がするのである。
ただ小さく一言、『寂しい』、と。

「山崎さん

『ん？』

振り向いた彼女は、いやに優しい顔をしていた。心が読めるとうのなら、きっと分かつてゐるはずである。

『ボクはそういう柔くはないよ』

「・・・・・わかっていますよ

(やはり彼女に会つてから、自分は彼女のことがばかり考えてしまっている。彼女は自分よりずっと強いはずなのだ。)

彼の気持ちを代筆しているのは、語り部たるボクであるが、ボクはこの時、彼の想いを汲み取れずにいたに違いない。

ボクにあるのは、ファンタジーと、やたら厚い猫型の面の皮、そして持ち前の好奇心と彼への濁つた愛である。しかしこの汚水のように濁つた愛という名の好奇心は、他でもない彼自身によつて濾過ろかされていくのである。

ああ、なんの偶然か。そういえば彼の名前は『アイ』であった。愛情深いフランス人の母が、それを思つてこの名をつけたのだとしたら　　彼以上に、この名で体を表すことは不可能ではないだろうか。

彼は出会つて三分の人間に感情移入し、真剣にその人の行く先を考えられる人間だった。それが人間か否かはもはや関係ない。

意志疎通ができる、感情が合つて、立派に思考と現状判断、選り好みが出来る物体?は、体があろうと無からうと根性の曲がった病原体であろうと美少年の皮を被つた人魚でも化け物だろうが、つまり同じになるのである。

しかし彼自身がそんなに綺麗なのかと言つとそうでもなく、心底では(このボクが!)耳を塞ぎたくなるような暴言と、理不尽な叫びに満ちている。彼は良い子だから、それを表面には絶対に出さないだけなのだ。

確かに彼をこんなふうにしたのは、親か兄弟か親戚か学校か友人かだろう。それを彼は分かつていて、けれど誰にも責任は問えないことも分かつていて。そして、最終的にその“責任”は誰でもない自分の上に降り積もつてくるだろうとも、わかっている。

この分かつてしまつていてる人間が、どうして『子供らしく』出来ようか。彼に無邪気に何も考えず遊び呆ける、そんなことは出来ない。考えてしまう。そんな人だった。なんて優しい天邪鬼。

?分かつてしまつ“から、彼はこんなにも優しいのだ。そして同時に、あまりにも残酷なのである。

ボクはアイとは対極に位置しているのかもしない。逆に人魚の彼とは、共通点が多すぎた。あの病院で感じたのは、そういうことだつたのかもしない。

童話が好きで、妹が大事で、茶目っ気が合つて、そして特大の猫被りの男の子。

その時、少しイケナイことが頭に浮かんでしまつたのは、ボクだから最早どうしようもないことだ。

・・・・ふと、魔法使いと視線が合つた。そつと指を立て、口元に立てる。

ああ、彼女はボクなのか。

人ならざる友人は、なんと心強いものである。

(「ていうかさ、この体大分ボロ雑巾だからね。さつきちょっと動かしたら、なんか変な音したし、君がこの体に返ってきた時ちょうど痛いかもしれないけど、ま、頑張つてよね。ぶつちやけ、今こうやって座つてゐるのも大分キツイし、リハビリとか時間かかると思つよ」

「自分の言動に、自重というのを覚えてください」
それはいつも梓に思つてゐることだった。)

『君の目が覚めた時』

辻 聖は右手を束縛されながら、アパートへの階段を踏みしめていた。

右手に繋がるそれ、自分より一回りも一回りも細い腕は白く、精一杯伸ばされ自分の指を握りこんでいる。身長差があるのでから離れて歩けばいいものを、この少女はどうしてもそうしてみたいらしく聖は右半身を傾けながら、突っぱねたように、赤さびに塗れたそこを上つていた。

「あっちゃんさ・・・」

「あっちゃんじやないよーあ・さ・こー」

「・・・朝子ちゃんさあ、もう夕方なんだけど」

「いいから、わたしんち寄つてつ！」

ぐいぐい右腕を引く彼女に、聖は緩く首を振り従つた。

朝子は女性とは到底言えず、少女という大きなくくりでは、いさか説明不足である。彼女は今年で七つになる小学校一年生、背中にはまだ綺麗な空色のランドセルがある。

流行なのか、それとも趣味なのか、あの開くとべろんと長いブツのあるものではなく、まるでスクールバックのような形状を、背負えるように仕立てたものだつた。長方形の中頃に、カチリとはめ込むタイプの金具が二組ずつ、段階に分けてあるところを見ると、見た目よりずつと収納性はあるらしい。真新しいリゾーダーの袋が横から覗いている。

自宅通学の聖には余計に小さく見える室内を。ちょこまかと動き回る真っ青を背負つた小人を視界の端に入れながら、聖はトウガラシのように真っ赤な頭を搔いた。

「そこーそこ座つてねー！」

「ああ、はいはい」

犬の顔をした座布団に腰を下ろすと、百均で買ったようなプラスチックの小さなコップが、なみなみと麦茶を収め出された。

「聖くんは男だから青ね！」

キャラクターをきらきらしたラメが彩る半透明のコップを見、すぐ横にある彼女の整理された学習机を見、どうやら彼女は女の子ながら青が好きらしいと麦茶に口をつける。自分の家とは違つ違和感が、喉を滑つて落ちて行つた。

ドンッ

ぐらぐらと築三十年は在る壁が揺れた。

「あらお隣だわ」

（母親の真似なんだうなあ）

「めずらしーのね」

「隣、どんな人なんだ？」

「先生してゐるおじさん。あんまりしゃべらない人なの。めずらしーなあ、いつも静かなのに」

『珍しい』を繰り返し、朝子もそろそろと水色のコップを机に置くと、腰を下ろしました咳いた。「めずらしーなあ、あのね、すごい優しい人なのよ？前に野良猫に餌やつてるのをみたもん」

そう言つた途端、また ドンッ 「きやあ」 朝子の肩が跳ねる。

「・・・まあ、どんな人でも色々あんだよ。お前気をつけろよ？」

「ん？」

「人つてのは見かけによらないんだからな。優しそうなおじさんが本当に優しいかなんて分かんないんだから、ホイホイついてつたりすんなよ。俺みたいには行かないんだからな」

「でも聖くんは、優しく見えない優しい人だったんだからいいじゃない」

あまりに的確なその台詞に、聖は思わずハンズアップした。脱帽だ。女の子というものは、いつだって上手である。

『君の目が覚めた時』（後書き）

赤い髪の不良・辻 聖

聖なる、と書いてアキラ。あきらか、を転じて『聖』になった。
ぶつちやけ家族以外に正確に読んでくれるのが悩み。

青いランドセルの女の子・三浦 朝子

通称・あっちゃん。おませで可愛い女の子。女の子なのに青色が好きなのが、ちょっと恥ずかしい。そんなお年頃。お母さんはお腹に赤ちゃんがいるため入院中で、聖に世話になっている。

『必ず会いに行く』

「・・・・・どうして」

凛の短い人生の中で、何度この四文字を呴いたであろうか。いつだって彼は、この台詞を床に叩きつけるように口から吐き出していた。しかし今回ばかりは趣が違う。ボロリと、取り落とし転がるようにそれは口から出てしまった。「・・・・・どうして」田の前には男。それは求めた結果である。きちんと、『青島草平』といふ国語教師の男だ。けれど。

「どうして」

“青島”は、にっこりと笑った。

「どうしてアンタが来たんだ、魔法使い」

「ボクは願いを聞いただけさ。それ以上でも以下でもない。代理だよ代理、メロスとそのご友人みたいなもんさ」「・・・・・はは、何言つてんだ」

願つていた。

「君の願いは、自分にとつて一番の障害である？化け物退治“と？魔法使いを殺すこと”だろ？」

大きくない扉に立ち、こちらを笑顔で見つめるのは、あれほど焦がれた男と求めたものである。凛は唇を結び、喉を鳴らして唾を呑んだ。

「・・・・・馬鹿だなあ、お前。ぶち壊しにしやがって」

泣きそうだった。ああ、終わつた。そう思つた。

中年男の顔で、魔法使いは不思議そとにこちらを見やる。（・・・・・そんな顔、するなよ）

男の頭には包帯、右頬にはガーゼが貼られていた。笑うと、間抜けに欠けた前歯が見えた。ぐっと眼をつむり、波をやり過ごすと凛は一転、青島を睨みつける。

「・・・・アンタのやつてることはいつだつて的外れなんだよ。アンタがそつやつた時点で、俺のしたかったことは全部終わつたんだ。俺は？化け物退治？とは言つたけど、？人殺し“をするとは言つてないだろ？目的には経過が必要なんだよ。過程が大事だつたんだ。・・・」

青島に魔法使いがくつついた時点で、それは一石二鳥ではなく土崩瓦解、凜にとつての事実上のチエックメイトだつた。

苦しい。溺れたのは自分の方か？『やうう』と決めて、その時はこんなにも苦しくは無かつた。むしろ、いつか自分はそうなるだろうと。運命だとすら思つていたのだ。

「俺は時間稼ぎがしたかつただけだ。そいつがちょっとでも俺に触れれば、それでいい。こつちは未成年、そつちは立派な社会人。あと三年だ。三年で、俺は十八歳になる。五年なら二十歳だ。それまでそいつを遠ざければそれでよかつたんだ。俺にはまだ時間がいる。だから、なるべく乱暴に扱われて怪我の五つや六つ付けてくれれば・・・・つて、思つて体は張つたのに・・・」

凜は緩く首を振る。

「？人殺し“になつちや、爛を守れないだろ？よく考えろよな。分かることだろ？化け物は追い払えりやそれで良かつたんだよ。なのにあ・・・・アンタがそれを分かつてやつてるんならまた別だけど・・・・違うみたいだし。子供が好きなら、子供の心を知つてから動けよ。馬鹿だろ」

魔法使いは憎い。けれど、超えてはならない一線があることは、凜はよく分かつていた。凜の目的は、あくまで『兄妹共にあること』なのだ。

「俺はあくまで“被害者”じゃなきやいけなかつたんだ。だから病院の下調べまでして・・・・・知らないつて顔だな？教えてやるよ。そういう場合、被害者には病院の診断書が必要なんだよ。一番手つ取り早い。だからあの日、この辺の病院調べて色々準備して、跡が残つてゐうちに証拠とつてやろうとか考えてたんだ」

もはや羞恥も何もない。女ではない男の自分には安いものだとさえ凛は思う。セイレーンがある自分ならば、完璧に出来上がるはずだつた計画だ。

溺れたのは自分が方か。人魚は王子を討つた後に海に帰り、まさかもう泳げないとは思わなかつた。自分はもつエラもヒレも無くしてしまつていたのか。なんてことだろう。

「どうして」凛はもう一度、この言葉を吐いた。今度は意識的に。「どうして邪魔したんだよ……」

「言つただろう? ボクは代理で来たのさ。伝書鳩の代わりなんだ。所詮、今のボクは鳩程度。君を邪魔する気は無かつたし、この結果にボクも驚いてるよ」

「わざとらしい……」

言つて、凛は視線で魔法使いを促した。

「どうせ爛だろ? このタイミング。それなら仕方ない、次を考える「ブツブー残念。爛ちゃんもだけど、他多数もおまけだ」「他多数?」

「『わたしは否定もしないし、肯定も出来ない。ただ君がそうしたいならそうすればいい。ただ、過程が違えば結果も違うことを忘れるな。凛がなりたい状態と、わたしの理想は違つ』」

なんだそれは、と意味を込め言つたつもりだつた。相変わらず会話のかみ合わない魔法使いが口にしたのは、片割れの怒りだ。

「・・・・やつぱり、アンタ止めにきたんじやん」

「いやいや、? 他“も聞けば、君は次すら考えなくなるかもしけない。そりだらう?」

(いいや、俺はやるよ)

想いはそう軽いものではない。何せこちらは、決意を込めて人生を切り売りしているのだ。自信がある。

この想いは、深く、深く。根強く砂上の奥の奥に、根を張り水を啜つているのだ。多少の風にそつ簡単には折れない。むしろ、その枝を屈ぐことさえ出来ないだろう。

「『お友達になりました』だつてさ」

虚を突かれた凛に、魔法使いはニヤニヤと口元を緩め、続きを聴かせた。

『今回のことでの、君の様な友人が居れば楽しいだろ?』この結果を導き出しました

『なので、』

『お友達になります』

『彼らは止めるために伝言を頼んだんじゃないよ。純粋にいや、不純に? 今回のことでの君みたいな友達がほしいな~、と、そう思つたんだつて。六十億人の一人に興味を持つてもらえるつてのは、まさしく奇跡だよ? 君は大人が血を吐いて欲しがる『時間』つてのを、ゴミ箱に捨てるつもりかい? それがなんて勿体ないことか、今の君にはわからないだろ?』騙されたと思つて青春しろよ、青少年

「なんか腹立つな。アンタら」

不快も露わに、凛は立ちあがる。そう広くない部屋を見渡し、自分の帽子を手に取ると田深にそれを頭に被つた。昼間でも薄暗い室内で、ぼんやりと帽子のつばの影、瞳が光る。

『そして、こうしてボクらが会話することもまさしく奇跡だろ? ボクが過去に君を選び、そして今こうして話している。すごいことじやないか』

「・・・・・アンタ、悪い顔してるな。極悪人だ。とんだ詐欺師だよ」

凛は迷わない。嫌悪を露わに突き進んだ。後悔はしない。目的達成のためなら、手段は選ばない。狡猾に生きなくては何もできやしないのだ。

『そういうのは名前を名乗つてから言いなよ。俺もある時、そうしただろ?』

すれ違いざまに凜は青島の頬に口づけ、彼女の耳元で囁いた。

「海の底を泳ぐ人魚の眼をごまかせると思うなよ、山崎さん。魔法使いへの願いはもう使っちゃったんだろ？だからって、そんな中年男に取り憑いたら戻れなくなるかもよ？」

明るい外の土を踏んだ彼の背に、梓は口元を釣り上げて猫の皮を脱ぎ棄て言つた。

「・・・わつるい顔。今キミ、すつじい悪人ヅラしてゐよ。鏡見てきたら？」

【猫被り】

本性を隠し大人しく見せること。知つて居ながら、何も知らないふりをすること。

さて、その時、歩道橋に居たのは五人の学生だった。それぞれ面識などは無い。ありふれた、年齢もバラバラな五人の学生である。時刻は丁度、午後4時ごろ。少しづつ下校途中の学生が零れてくる時間。

眼鏡の女子高生は歩道橋から落ちた。

金髪に蒼い目の男子中学生はそれを見た。

もう一人の蒼い目の少年はその場を何事も無かつたかのように離れた。

蒼のランドセルの女の子はそつと下を覗き込んでみた。

赤い髪の不良は慌てて歩道橋を駆け下りた。

これはハッピーハンドをより盛り上げるため、魔法使いがかけた魔法なのだ。

魔法使いといふウイルスは、？魔法使い“といふ病気に感染させ、去っていく。

小嶋凜に感染し双子を再会させ、廻り廻つて四日前に山崎梓をあの歩道橋から落とし、坂城藍に導いた。辻聖はあの日三浦朝子と出会つたし、彼らはこの先、その存在によつて何かを変えられるのである。

この魔法が始まつたのはきっと、ずっと昔。

むかしむかしのお話、だつたのだ。

今のボクにあるのは、ファンタジーとやら厚い猫型の面の皮、そして持ち前の好奇心と彼らへの濁つた愛である。

しかしそれも、いつしか忘れてしまつだらう。魔法使いに意思なんてないのだ。ただ求められるように魔法を使い、そして他を探しに行く。

風に流されるままのタンポポの綿毛に、何処で芽吹くかなんてわ
かりやしないのだ。

魔法使いに愛された恋する大きな子供の結末

男は恋をしていた。

とんでも馬鹿だと笑えるほど、馬鹿な恋だ。

罵るよりも大声で笑つてくれ。本当に馬鹿で馬鹿で、自分で途方に暮れるほどだ。

いつから中年と言うのだろう。まあ確かに中年だけれど。学生時代、誰よりも若さに満ち溢れていた男は、不貞腐れたようにたまにそう考える。

子供の様なところのある男だった。

そんな彼がこの職を選んだのは恐らく必然である。とある、公立中学校の国語教師だった。

柔道に身を焦がした過去。他校との交流会などでは必ず、体育教師と間違われる体格をしている彼は、しかし何故か、『国語教師』だと名乗ると、なるほど、と言われる。日本と言う国は、言葉を大事にする人種だ。彼はそんな国民性を分かりやすく反映した性質をしていて。

そんな男は、当然この年齢、結婚歴があった。つまり=離婚歴、バツ一だ。

恋やら愛やら情やら、そういうしたものも知らないわけではない。元妻とは恋と愛はあった。しかし情が生まれなかつた。實にありがちである。

人生というものは一冊の本に出来ると言つが、男の物語はあまりにチープ。すぐに絶版。だって男の人生には『山場』が無かつた。読者の興味をそそる山場。物語はゆるやかに上昇し、そして一氣

に下降しなくてはならない。男の人生はゆるやかに波を繰り返すのみで、ガタガタと砂利道の様に不安定ではあったがそれだけだ。実際に白ける。

そんな男に『山場』が訪れた。ゆるゆると急上昇。しかし男はその急激な上り坂に、これ以上ないほど苦しむことになる。

男は生徒に恋をした。

それは人魚の少年に言わせれば、不幸な事故だった。たまたまその場に居たのがその男。可哀想なほどに彼に焦がれた男だった。それが彼自身に向けられたものなのか、それとも彼の『中』にあつたものにだつたのか。それは誰にもわからない。

しかし男はそれを彼自身へのものだと純粹に信じていた。

ただ男は少し考えてしまったのだ。性別年齢立場すべて抜きにすれば、いかに自分にとって、彼が人間として魅力的か。

彼は同年代と比べ物にならないほど、大人びた 否、大人そのものの考え方をしていた。そんな彼が、まさか妹のことだけには子供に戻るのだが、それはまあ、後の話である。

子供の様なところのある男だった。

一時のこととに身を任せたことに、男は深淵に身を漬けるほどに後悔する。男はその事故を事故とは思わなかつた。男として、人として、大人として、教師として、そして彼に恋した人間としての自分の落ち度だと思つた。

『山場』の急降下はここから始まる。

一年後。男は私立の女子高に同じく国語教師として赴任。あまりのことに哀れに思つた、知人からの紹介だつた。若年のころ、海外に数年留学していたのが良かつた。

一度地を突き破り、地下を虫の様に這つたが、それも上昇へ向かつたかと思われた。だがそれはもしかしたら、地の底ではなく、深海だつたのかもしれない。月を目指したと思った魚は、より深くへ潜つていたに過ぎなかつたのか。

忘れたと思っていた彼に、良く似た少女に出会つた。

彼女は彼と同じ年だった。

彼女は彼の双子の妹だと語った。

何の奇跡か。すると成長した彼が現れた。

男は度重なる偶然に、少し酔っていたのだ。少年の様なところのある男だった。久々の純粋な恋に、少年の真意すらよく見えていたかった。

偶然はもう一度起るのではないかと、彼も想ってくれているのではないかと。

馬鹿な勘違いをした。

あまりに哀れ。

いつそ笑え。彼は偶然に愛された男だったのだ。いや、愛されたのは悪戯好きな魔法使いに、かもしれない。

男の心を一言で表せばこうだろ？

どうしてこうなった！

ようするに彼は、とても運が悪かったのだが。

たとえば、人魚姫の姉はどう思つていたのだろうか。

自分の髪を魔女に差し出してでも、妹を守ろうとした姉姫。姉妹で一番の美貌と褒め称えられる妹を、美しい自分の髪を切つてまで救おうとした。

その姉姫はと言えば、異種族の叶わぬ恋に声を無くし、陸に上がり、やがて想いもむなしく果てる。

姉姫はどう思つていたのだろうか。美しく純粋な妹。その最後も悲劇的かつ、美しいものだったに違いない。

姉の犠牲と共に手に入れた短剣も、彼女は海に捨て泡になつた。

姉姫はどう思つただろうか。悲劇にただ涙を流すか、それとも最後まで気がつかなかつた王子を恨むか、それとも？

彼女の場合は三つ目の選択だった。

他でもない、今は亡き姉姫を恨み、なじつたのだ。

彼女は自分がどうしたって手に入らないものを、生来持っていた。

綺麗な心、綺麗な声、綺麗な体。

何の不満があるという。自分はいくら着飾り化粧を重ねようと、彼女の様にはなれないのだ。それを捨て、彼女は果てた。何も手にすることなく、ただ一人で満足して。

(ふざけるな!)

私だつて人魚姫なのだ。立場は限りなく同じなのだ。なのに彼女は優遇されている。その好意をアレは、あっさりと海に捨てた。

その理不尽さ!

美しかった髪は短くなってしまった。年月を掛けて、いつかのためにと、伸ばした髪はもう無い。

犠牲はその無くなつた髪の年月だけあつた。彼女と共に育つた年月だけあつた。それをアレは、剣と命と想いとを全て海に捨てたのだ。

人魚姫の姉姫はどう思つた?

さて、姉姫ならぬ、大野まことは、こうして、妹姫役を憎むようになった。

しかし今は違う。彼女らと王子が決別した今、もはや憎んでも、その相手はそこには居ないのだ。

ならばこうしよう。

大野まことの恋する男は、若く美しくもなければ、権力も無い男。ただ年不相応に、幼いだけの男である。

しかし彼女はそれで良かつた。今は無理だろうと、こちらは若いのだ。何年でもかけて美しくなれる。可能性はいくらでもあるのだ

と信じた。

彼女は門を睨みつけ、そして、ベルを鳴らした。

結末が分かるのは、あと十五年後。

円：

最近、顔が大きくなつたような気がする。

気のせいだらうか。鏡の前で、わたしは顎に手のひらを押し当てつづじつくりと自分を見つめた。

やっぱり。

アア嫌だ。何故だらう？ 太つた？

嫌な気がしながら乗つた体重計は、一週間前と変わらなかつた。運動不足？

なんだろうなんだろう。

わたしはそう可愛い方でもないし、親からもうつたこのお顔様はかわるはずも無いのだが、それでも一応お年頃。顔は小さい方がいいし、眼は大きくなりたいし、胸はそこそこ、眉毛がもつさりしてるのが嫌。

やだな。

わたしは憂鬱な気分で、顔サイドの髪を下ろし、前髪を上げた。女子の裏ワザだ。

むくみは水分不足だつけ？ やだなあ。

女の子はある程度までなら、可愛くなれると思つ。これに年齢はそういう関係無い。

必要なのは、一に環境と、二に根性、三に努力で、四に妬み。

一、環境。これは極端に言えばお国柄。（ああ、そうだ、わたしはこれを世界単位で言つていい。恐らくこれはどこで等しい見解だ

とわたしは思つてゐる)

つまり、その場に最も好まれる姿。これを知る。学生ならば協調性。社会人ならば清潔感。モデルさんなら格段上の美しさ。お母さんならば、華やかさよりも愛らしさ。

さらにこれには「一つ目の意味もあるのだ。道具、もしくはそれを揃えることの出来るお金と店があること。これもまた『環境』である。

一、根性と二、努力。

どこの熱血青春マンガの標語？いやいや、女の子の美については、男の子のプライドと同じだ。生活に受け入れてしまえば譲れるものでなく、さらには友情にまで影響する。ひいては人生に多大な影響を及ぼす。

自信の外見を自覚し、美を意識するのは（早ければ早い方がいいといふわけではないが）ちゃんと知らねば恥をかく時というものがる。女は二十五過ぎれば、スッピンで外を出歩けないのだ。

人間は視界に頼る生き物なのだから、それは礼儀としてちゃんとしなければならない。入口が汚い店には客は来ないのだ。外見と言つのは、ミニミニケーションの玄関窓口である。

しかしそれを維持するのは大変なことだし、はつきり言って無理だ。そこで大事なのが、諦めない根性、積み上げた努力、といふわけである。

さて、そしてその四。
妬み。

なんて嫌な字面だろう。女に石と書き、妬むと書く。女は身に石を持ち、妬む。

やだねえやだねえ。本当嫌だ。この顔のむくみと同じくらい。

しかし女は、これを動力源にして美しくなる。

子供は愛と希望がお友達。大人は酒と肴がお友達。男はプライドがお友達。ならば女は、妬みとお友達。

友達は友達でも悪友で喧嘩友達だ。やなやつなんだが、共にいる。自分と言う口号ーーの中に、必ず背を向け、端っこに居る。さらば

いえば眼が合うと物凄く嫌な顔をしてくる。

「こつちみんな」と、睨んでくる。それはなぜか？自分が嫌な奴だつて、自覚してるから。自分が居ない方がいいことが分かつていて。嫌われてるのが分かつてる。だから眼が合うと無言で睨み、けん制しつつ、誰も居ない端に寄る。

可愛い奴ではないか。わたしは結構好きだ。妬みと言う感情は一匹狼なツンデレだ。ツンツンツンツン。たまに寂しくなつて寄つてくれる。これがデレ。

そう、妬みは寂しさと直結している。

羨み、自分に失望し、生まれる感情だ。「自分はああいうふうにない。なりたい。つらやましい。でも無理だ。」そして「妬ましい」となる。

心が石になる。体も固く石になる。重くて硬くて固くてごろりと転がる。妬ましい。しかし女は強いもので、その柔らかで筋肉なんてまるで付かない体に、ダイヤモンドより固い部分を持つている。

女性はそれを拳に握り、妬みの石を打ち碎くのである。ちなみにこの拳、対男性に向けられる場合もあるので、くれぐれも女性の取り扱いは注意してほしい。

岩をも砕く石、ならぬ意思である。

女は妬みを乗り越え、負けるもんかと、美しくなる。ついでにその経験は拳に蓄積され、攻撃力も増すので男性はより注意が必要である。再三言おう。注意しろ。場合によつては命にかかる。よく色々へ女に後ろから刺されるぞ注意しろ、と比喩する。妬みは大きく、固くなりすぎると、刃物のように尖るのだ。女はそういう強さももつていてる。

現代社会、美しくなる手段は本当に色々ある。特に日本はそれが豊富だ。目移りするほど豊富だ。いざとなれば美容整形と言つ最終手段、リーサルウエポンもある。

この妬みから解放されるために、女は環境を整え、努力を重ね、根性で這いあがつてくるのだから、恐らくこの感情は最も重要な機関

である。

女は石と言つ名の固くて硬い、意思を持つ。

さて、しかし残念ながら、わたしはその妬みとは近ずとも遠からず、結構友好関係を築けていると思う。

それと言うのも、わたしは基本的に、妬みと言つ感情は眺める側だからである。

わたしは人を妬まない。付かず離れず、遠くで見ている側の女の子だ。

リアルで妬みとう感情は醜く見えたものではなく、しかしわたしはその見た目よりも、性格と言つ名の法則が好きなので、自分は妬みの感情を持たず、他の誰かさんの妬みを觀察する。

趣味と言つには悪趣味すぎて大声では言えないし、言つつもりも毛頭無い。履歴書にも書けないなんちゃつて趣味だ。

見ていて楽しいものではない。けつしてウキウキドキドキ胸躍りはしない。ただそこに居るのを確認する、その行為が大切である。安心する。世界はあまりにも色褪せて見える。物語の世界のよう、溢れる色はそこには無いのだ。

世界は真っ白。どこを見ても変わらず同じである。妬みと言つ感情は黒なのだ。伸びる黒い描線は、白いそこに初めて絵を、文字を描く。

もしそこに他の色が生まれたとしても、黒はどうやつたって邪魔にはならない。どんな色に合わせても黒は美しいと思う。だからわたしは、その色を持つその感情が好きだ。

女が持つそれは、いつだって泣いている。

口惜しい、くやしい。

なんでわたしは寂しいの。

寂しいのが、口惜しい。

そしてわたしは思うのだ。

(愛い奴め)

艶：

美人と噂の西藤ちゃん。

女の子のくせに、中学まで野球してたとか。男子一十人のチームメイトに女子一人。だからか、普段大人しいイメージだけれど、ここでという時は男子より男前に動く。意外に行動派。

ショートカットだけど、ちょっと全体的に長めなので、普通に女の子。かわいい。くせに、表情は少ないんだから。

たまに勘違いした男子とか寄つてくるんだよね。無口で無表情。ステリアス。おとなしそう。

そんなことないよ。あの子、淡々と行動派だから。やるときはやる子なのよ。凄いでしょ。アンタよりイイ男できるよ。可愛いより綺麗。男顔ではないけど、中性的。基本的に女子に優しい。無駄に紳士。

・・・なんか王子様っぽい。

ねえアンタ知ってる? この人凄いのよ。綺麗なだけじゃないんだから。

顔のむくみはまだとれない。

というか、なんだらう。どんどん大きくなっているような。。。

やだなあやだなあ。ホントやだあ。

そりやさ。忙しいさ。これでも。

そんなもん? って笑われるかもしれんけども、わたしからしてみりや、精一杯よ。

なんとか髪型で誤魔化してるけど。うーん。。。これわたし可笑しいんじゃないの?

だって、三日でこんななる? っていうか、これもくんでるっていう

より、顔自体が大きくなつてない？

やだわ。本当やだ。

やだなあ・・・・・。

ああ、顔のむくみ（？）はまだ続いてる。晴れてこのよくわからぬものには（？）が付いた。

演：

ミヅキはいいやつ。かわいいやつだ。
一番、あいつ、妬みと言つ奴に近い。つまるところシンデレラ。可憐
い。

短氣だけど、姉御肌。かつこいいのもある。見た目は日本人形みたい
いのにさ、口を開くと姉さん。
三人の中でも一番小さいせにね。

「なつちゃん、最近どうしたの？」

ミヅキが言つ。

「おかしこよ、アンタ

え？

・・・・何が？

えん（？）：

【むくみ】

浮腫み。

顔や手足などの末端が体内の水分により痛みを伴わない形で腫れる
こと。

漢字だと浮腫みか。・・・・生々しいな。

辞書で引くんじゃなかつた。なんかこわい。やだこれ。
いやでもしかし、むくみじや、ないよう見えるんだけどなあ・・・
・うーん。まあわたしも成長期、顔くらい大きくなる、か？

怨：

その子はちょっとだけわたしに似ている気がする。
いいんちょと勝手に読んでいる人。わたしは彼女を心からの親愛を
こめて、あだ名で呼んでいる。ここで大切なのは、あだ名の意味で
は無くあだ名で呼ぶこと 자체である。

彼女もたぶん、世界が真っ白の人だ。ついでに黒が好きな人。
出来ればもっと親しくなりたい方なのだけれど、どうにもうまくい
かない。ミヅキはそれを、「彼女は興味が無いから」と言つ。
なるほど。ならば仕がない。

彼女はわたしに興味が無い。彼女にはまたわたしも、真っ白の世界
の住人に見えるのだろうから。

俺：

愛憎の無い愛は、愛ではないといふ。
妬みを持たねば嫉妬しない恋は愛にはなれんという。
ただの憧れ止まりである。と。
さて、ならばわたしのこれは、なんでしょう。わかりません。
だからでしょうか。
そして彼は、いつのまにか旅立つたのです。

遠：

燕：

ある日、魔法使いはやつてきた
かの人は知っていたのでしょうか
全て知っていたのでしょうか
魔法使いはうなずいて、ひとつ、魔法をかけました

魔法使いは少女に言いました
「つきはあなたがまほづかいよ」

縁：

わたしにとつて、貴方はクラーク博士でドジソン教授でした。

さびしい。

くやしくはない。

ただわたしは、さびしかった。

妬みが留守の女は駄目ですかね？どうでしょつか。

だれか・・・・いいえ、貴方がいいです。

先生、教えてくれませんか。

わたしは貴方の生徒です。

羨 厥 鉛焰 湾 炎 垣 渕 援 塩 沿 延

えん

得ん

獲ん

必要なのは、一に環境と、二に根性、三に努力で、四に妬み。

この四つを忘れなれば、女の子はある程度までなら可愛くなれると思つ。何せ方法は色々あるのだから。女にはとっとおきの裏技があるのだ。

さて、ちょっとした勘違いをしてみたい。今のわたしは魔法が使える（かも）しない。ならば使おう。使うしかない。

これは妬みだろうか？ 妬みだろう。

こんな醜く愛しいものがわたしの中にある。素晴らしい。わたしは幸せである。

いやだがしかし、ツンデレな妬みと言う人物は、いざ自分の出番となると、うれし泣きか悔し泣きか涙が止まらないらしく、たいそうに苦しんでいる。ので、なるべく早くこの感情は拳で碎いてしまいたい。そうすればまた、彼は元の一匹狼なツンデレに戻るのでしようから。

四つの条件を晴れて揃えたこのわたしは、五つ目に魔法を携えて奇跡を起こしに行こうと思う。

さて、最後に彼女を真似て雑学を披露しそう。

顔の大きい人は寂しがりなんだそうだ。
なるほど、納得。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680p/>

天の邪鬼と猫かぶり

2011年1月5日15時55分発行